

# 佐藤くんの大嫌い家族

痲歌論

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公の佐藤裕樹が、突如現れた姉妹の伊織と砂亜菜の2人によって生活が一変する。

初めて関わった時には楽しいと思っていたが、関わる事に過去の経験を思い出し、姉妹のことを嫌いになってしまう。

伊織と砂亜菜が裕樹を振り向かせるために様々な作戦に出る！

だが…伊織と砂亜菜の2人は、天使でありなにか秘密がありそう……………。

# 目次

♥ 出会いも嫌い	1
嫌いなワケ	10
ネコのおぎゅう	15
おぎゅうの日常	22
♥ 友と興奮	30
突入！学校！	35
構ってくれないならヤっちゃんぞ☆	40
認められたい	46
Acknowledge you	53
抑えていたこの気持ち、まだ応えられな	
い。	59
恋心と響いた声	66
素直な気持ち	73
特別編：ある日の会話。	81
あなたの気持ち、気づいてくれない私の	
気持ち	85
誰も知らない	93
帰還	101
特別編：帰還の夜	107
ひとつ目の借り	111
急病	118



## ♥ 出会いも嫌い ♥

俺は家族が嫌い。

だが、その家族は普通の家族じゃない。天使や悪魔、ワルキューレやサキユバスなど。人間とは程遠い存在の“姉妹”のことを、俺はすごく嫌っている。

最初の出会いは突然だった。

学校に向かう中、スマホで色々いじっていた。

上からMINEのバーが降りてくる。

母親からのメッセージだった。

バーをタップし、トーク画面に移り送られてきたものを読む。

「裕樹、言ってなかったけど今日転校生が来るらしいわよ。可愛い女の子2人だつて。その子たちとこれから仲良くする予定だから、学校でちゃんと話すのよ」

言うことが同級生の男子なんだよな…。

ていうか、なんでそんなこと知ってた？あと、『これから仲良くする予定』ってどういうこと？

「クラスメイトってことか……？？」

つい思っていたことが口から出てしまう。その画面を見つめたまま、歩いていく。

(※歩きスマホは危ないからやめようね！by裕樹ママ)

角を曲がる時、正面から来た人とぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい！」

謝った時、頭の上に何かに乗った。

それを手に取り、見てみると真っ白な羽根。

美しく、見惚れてしまうほど。

我に返り、ぶつかった人を見るとその人は真っ白な羽が生えていて、神々しいオーラを感じた。

金髪ツインテールで、真っ白なワンピースを来ていて……真っ白なパンツ……。

つい、ほんの出来心でその人のワンピースの中のパンツに目がいつってしまった。

「つてあんた！どこ見てんのよ!!!」

思い切り顔を蹴られ、ぶっ倒れた。

どうやら軽くやったつもりだろうが、あまりにも派手に倒れたので、あたふたしている状態で目の前まで来た。

「あつ、えつと……ごめんなさい！強くやりすぎてしまつて……。」

その子は膝を付き、俺の顔に手をかざす。

すると、緑色の花粉（オーラ）のようなものが俺の周りを囲んでいく。どんどん痛みが引いていき、楽になっていった。

「あ、あれ……痛くない。それに、怪我也治ってる……。」

「実はアタシ、治療が得意な天使なので！」

「ほおーん……天使か。ん……天使？」

「あ……。」

顔を真っ赤にしたその子は、強引に俺の事を後ろに向け、「少し待って」と言った。

そのあと、「いいよ」と言われたので振り返った。

そこにいたのは、さつきとはまったく違う子だった。

「は？えつと……さつきの子は？まだお礼も言えてないのに……。」

（まあお礼というか蹴られたのは俺が悪いんだけど。）

「そのさつきの子よ！同一人物！ここでは天使の姿がバレないように人間の姿に変身できてるのよ。」

黒髪ツインテールで、真っ白なワンピースではなく制服を来ており、羽も消えていた。

「意外と便利なもんなんだな。」

「素直に受け止めすぎよ！なにか疑問に思わないの!？」

「だって目の前で怪我をあんな綺麗に治されちゃ疑問もなにもほんとに天使としか思う

「しないだろ。」

「確かに…それはそうね。」

あれ、案外バカか？

そして、天使とか関係なく1つ疑問が浮かんだ。

「もしかして、お前転校生か？」

「ええ、知っていたの？」

「なんか俺の母親からMINEが来てな。」

そういうと、その子は俺から顔を背け、学校に着くまでずっと目を合わせてくれなかった。

目を合わせてくれないが、名前をまだ聞いてないもんなあ…。

「なあ、名前聞いてもいいか？」

「…アタシは砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>。天使の名前だとサナよ。」

「俺は佐藤<sup>さとう</sup>裕<sup>ひろ</sup>樹<sup>き</sup>。よろしくな。」

俺が名を名乗ると、いきなり目を合わせ、「やっぱり…」という言葉を残して学校に向かっ*て*いきなり走り去っていった。

「あの子、結局なにかしてえんだ。」

☆☆☆



学校に着き、自分のクラスへと向かう。

席に座り、静かに読書を始める。

ここ最近俺の趣味は読書だ。

本は現実とは違う世界に連れていってくれる。その世界がとても面白い。

だから、俺は読書を邪魔されるのが嫌だ。

なのに……。

「なんで邪魔をするんだ！愛！」

「うわあ！急に大きな声出さないでよ、裕樹。びつくりするじゃない。」

毎朝学校に来た時、読書中に邪魔をしてくるのは幼なじみの佐々木愛。

左からずつとツンツンとやってくる。

日に日にその回数は増えて、対応すらめんどくさい。

「毎回なんで邪魔するんだ、愛。」

「そんなことよりさ、今日うちのクラスに転校生が来るらしいよ？」

そんなことよりと流されたが、転校生？もしかして、さつき会った……名前なんだっけ。

魚だっけ？

まあ多分そいつかな。

「でも、ほかのクラスにも、もう一人転校生来るらしいよ。うちに来る子どもんな子かな

く。友達になろつかなく。」

「もう1人来る…のか。」

すると魚以外にも誰か来るのか。

「もう1人も…女の子なのか？」

「噂によるとね。ん？もう1人」も？なに裕樹、知ってるの？」

「嫌。俺はあまり知らん。なにも知らん。」

愛から逃げるように後ろに下がると、ホームルームのチャイムがなった。

愛は席が隣ではなく、少し後ろの方なので、自分の席に歩いていく。

そして、ずっと気になっている転校生。どちらも女の子。魚と、もう1人誰かのどつ

ちかがうちのクラスに来る。

担任がクラスの扉を開け、さっそく転校生の話を始める。

「では、今日からみなさんの友達になる佐藤伊織さとういおりさんだ。みんな仲良くな。」

紹介された人は礼をし、自己紹介を始める。

「親の仕事の関係でここに来ました。佐藤伊織です。しばらく…えっと、佐藤裕樹君の家に同居予定です。」

・・・は？

なに？どういうこと？いや、そんな馬鹿な……。

頭の中で朝の母のMINEがよぎる。

『これから仲良くする』ってそういうことかよ！……………」

まあ当然、伊織さんは美少女。そんな子が俺の家に同居すると言うんだから、全生徒から視線を向けられる。

うん、俺もよく知らないのよ。俺も被害者だから、だからこつち見ないで…。怖いですみなさん。

伊織さんは俺の方に歩み寄り、俺の手を握る。

クラスが少しザワつとした。そして俺の背筋もザワつとした。

「裕樹君、これからよろしくお願いしますね。」

「あ、あああ。よ、よよろしく。」

突然のことで、今日の授業の内容全てが頭の中に入らなかつた。

友達にも話しかけようとしても、きっと朝のことで無視されるんだろう。

帰りの下駄箱で伊織さんが待ち構えていた。

「裕樹君、一緒に帰りましょう。」

「ああ、帰るか。」

2人で並んで帰ることになり、校門で伊織さんのことについて聞いた。

「伊織さんって――」

「伊織さんじゃなくていいわよ。伊織で。」

「いい、伊織。なんで家に来るんだ？親は仕事でこつちに来たんだろ？だったらその親と一緒に暮らせばいいんじゃないか？」

伊織は歩きながら顔を少し下げ、思い切ったような顔をしてこちらを向いた。

伊織が足を止めると目の前で白いものがぶわつと勢いよく出てきた。

白い羽が散る。あのとき、学校に向かっていたときと同じ羽が。

「私に親はいませんよ。いや、ほんとはいるんですがここにはいません。」

「は…？じゃ、じゃあ死んだのか？」

「いいえ。天界にいます。この世にはいません。遠く、遠く上にある世界です。」

「となると、親の仕事っていうのは嘘。でも、なんで俺の親と接点があるんだ。」

俺の口を人差し指で抑え、ニコツと笑う伊織。

「それは、今は秘密です。私のタイミングで言いますね。」

☆☆☆☆

伊織と家に着き、リビングに向かうと朝ぶつかった人がいた。

「あつ、朝に会った…魚だっけ。」

「砂亜菜よ！さ・あ・な!!!」

砂亜菜と睨み合う中、伊織は砂亜菜の手を取る。

「砂亜菜、裕樹君と仲良くしなさい。これから一緒に暮らすんだもの。」

ああ、やっぱこう目の前にするとこれから一緒に住むってことが実感できる。

伊織が胸に手を置き、思い出したかのように話し始めた。

「あ、忘れてたわね。改めて自己紹介させてもらおうわ。私は姉の伊織。ここに来たから、佐藤伊織ね。」

「ならアタシも……。アタシは妹の砂亜菜よ。佐藤砂亜菜。」

2人は俺に近ずき、耳元でこう言う。

「よろしくね！お兄ちゃん！」

## 嫌いなワケ

「よろしくね！お兄ちゃん!!」

俺に新しい家族が出来た。姉妹だ。それに2人。

だが、俺はそこから恋愛展開に発展することも姉妹が出来ることに嬉しく思っていた。かかった。

なぜなら俺は、姉妹が欲しくないからだ。

それはこんなことを思い出しちまったからだ。

姉妹が嫌いな理由を俺は頭の中でコマ撮り写真のように流れていった。

ある日、俺がまだ幼かった頃。とある姉妹がいた。その姉妹のことはもう覚えていない。覚えてくもない。

俺は昔、臆病で消極的な性格だった。友達の家に行った時たまたま階段の踊り場でその友達の姉妹にばったり会ってしまった。つい驚いてしまつて階段から落ちてしまった。

幸い怪我は大きくなかったが、俺が落ちた時、その姉妹は高々と笑っていた。友達はすぐに駆け寄ってくれたが、その姉妹はずっと腹を抱えて笑っていたのだ。それから俺

は姉妹という存在に恐怖と嫌悪の感情を抱いていた。

そして、嫌いなのもうひとつある。

深夜寝付けなくてテレビをつけた時に流れていたアニメを見ていた。それは途中で話はあまり入ってこなかったが数分後に流れたシーンで絶句した。それは主人公がその主人公の姉妹に無惨に殺されるシーンが流れたこと。

それでトラウマに思ってしまった、それ以降姉妹というものに再びあの2つの感情を抱いてしまった。

これが俺の姉妹という存在が嫌いな理由。

単純で地味と思われていても何も思わない。

弱いやつは恐怖というものに長い時間かけても勝てない時がある。

そう、こんな回想してる時も……。

「ねえ！お兄ちゃん！アタシの話聞いてる？」

砂垂菜からの攻撃を受けていた。

俺は砂垂菜からも伊織から話しかけられても適当に返すか無視するかの2択。

冷たくして、なんとか俺は過去の経験のようなことをしないようにしていた。

あんなトラウマ…俺はまだ死にたくねえ……

(殺されません)

「ちよつとー最初は声掛けても聞いてくれたのにいきなり冷たくして…。妹ちゃん悲し  
んじやうなー。」

「そうか。冷たいならコーヒーでも飲んでくる。」

「あ、ちよつと！話聞いてよ！」

「話を聞いたからコーヒーを飲みに行くんだ。」

ふいつと顔を横に向ける砂垂菜を一瞥して、コーヒーを飲みに向かった。

台所には伊織がいた。伊織は姉妹の姉だ。そして俺の姉でもある。誕生日が伊織の  
方が数日早いということで姉となっているが、正直今まで話した文は画用紙両面一枚く  
らいだろう。

「裕樹君、どうしたの？というか、私たち一緒に住んでから1週間は経つけど…。どうし  
てそんなに冷たいの？」

「ただコーヒーを飲みに来ただけだ。それにさつきも砂垂菜に言われたが俺は冷たいか  
ら今コーヒーを飲みに来た。」

今の俺は2人に対して、情はない。

だが、これはすべてあのトラウマのせいなんだ…。

正直、あのトラウマからは解放されたいが、この2人を見るとどうしても思い出して  
しまう。



「裕樹君、最初は話聞いてくれたよね…。今は…なんで？」

最初は声を掛けても

最初は話聞いてくれたよね

伊織の「最初は」という言葉に砂亜菜に言われたことも頭の中で過ぎる。

最初は最初はつて…そりゃあれを思い出してなかったからだ。俺だつて消したかったのに自分に姉妹が出来たらこうなつちまつた。

時刻は夜10時。台所で伊織と重たい雰囲気の中にある。

確かにこんなことで姉妹と仲良くしないことはどうかと思う。でも、俺は乗り越えられないんだ…。

いきなり俺はなにかもの淡い光に包まれた。

これとは思ひ、伊織を見るがなにもしていない。というかなぜかホツとした顔をしている。

つい、後ろを見ると砂亜菜が俺に光を与えていた。出会った時のように、俺は体と心が楽になつていった。

「少し楽にさせようと思つただけよ…最初みたいに勘違いしないでよね。」

「あれは勘違いとかじゃなく俺の怪我だろうが…。」

まだ俺は2人に理由を話すつもりはない。

だが、この姉妹といると少し楽になる気がする。

「それで、お兄ちゃんはアタシたちに話す気はないの？」

まだ：いいかな。正直言つてこの2人に慣れてないし。怖いし。臆病者つてことはわかつてるけど、どうしても慣れない。

「ああ。まだ：：な。」

「ふーん：：わかつたわ。お姉ちゃん。兄か弟が出来たらの話：：実行しよ。」

砂亜菜が伊織とコソコソ話を初め、何かを決心したような顔をした。

「裕樹、まずは私の『おもちゃ』になつてもらおうわ。」

「は？おもちゃ、おい伊織何言つて：：ちよ、砂亜菜!!」

砂亜菜に助けを求めても、笑顔で手を振つて見送るだけだった。

くつ、くつそく。あの野郎。あとで覚えておけよ……。

そう心の中で思い、俺はただ伊織に引きずられていくだけだった。

そして俺は伊織の部屋で沢山遊ばれたのであった。

翌日の学校。

「つ〃か〃れ〃た〃く〃」

「だ、大丈夫裕樹？」

机の上に顔を付けて疲労感じる俺を愛が休み時間ずっと心配してくれた。

## ネコのおぎゆう

春が終わり、梅雨の時期に入ったある日。住宅街の道、茶色の毛をした猫がダンボールの中に入っていた。

まるでその雨を降らしたかのように大きく鳴いている。

学校の下校中に私——佐藤伊織さとういおりはその猫を見つけた。

「ニャーニャー!!」

「あら、可哀想……一体誰が捨てたのかな。」

持っていた傘の中に猫を入れ、共に雨をやり過ごす。

「裕樹君の家って、ペット大丈夫なのかしら。」

「ニャー?」

「そんな愛くるしい顔で訴えられちゃ……連れていくしかないじゃない。」

私はダンボールごと猫を運び、家に帰った。

☆ ☆ ☆

「ただいま、裕樹君少しいかしら。」

「おお、なんだ。改まって。」

「単刀直入に言うわ、ここってペットは大丈夫なの？」

ポカンとする裕樹君…案外可愛いじゃない。

「あ、ああ。母さんに聞いてみる。」

台所に向かった裕樹君を見送り、靴箱に靴を入れて猫を自室に連れていく。

ニャーと可愛らしく鳴く猫を見ていると心が癒される…。

しばらく猫とじやれていると、ドアがノックされた。ガチャと音を立てる。開けてきたのは裕樹君だった。

「おーい、伊織。ペットは大丈夫らしい。それと、今日の夕飯は牛丼だ。」

裕樹君の「牛丼」ということに反応したかのように猫はいきなり走り出し、裕樹君の足の間を颯爽とくぐり抜けてリビングに向かった。

私と裕樹君は猫を追い、リビングで見た姿に驚いた。

猫が人のように椅子に座り、牛丼を食べていた。

「は…?なに、伊織なにした?トラックに轆かれそうなところを助けたのか?」

「いや別にそんなことはしてないわよ。ただ道に置いてあったから、連れてきただけよ。」

裕樹君と共に困惑をしていると、家では聞いた事のない声が響いた。

「この度はありがとうございます…ございましたにや…少しわがままなのですが…お風呂に入っ

もいかにや?」

「は? (え?)」

「ええええええええええええ?!?!」

状況が理解できないわ…。猫が人みたいに食べて、人の言語を話す…。どういうこと、最近の猫は最新技術で話せるようになってるのかしら。

「どうやら…。驚いてるみたいね…。」

「そりゃ驚くわよ。普通この世に言語を話す猫とか悪魔とか天使とかいるわけがないでしょう?」

「あんな天使だろ。」

「へえ…あなた天使だったんだ…。私は…化け猫<sup>ほけねこ</sup>。妖怪。」

化け猫…聞いたことしかないわ。日本のものに関しては無知だからどう対処すればいいのか…。

再び化け猫は牛丼の食事を始める。

1口食べるごとに化け猫の体から煙が立ち込み、徐々に姿が変わっていく。

そして、変わったあとこの姿は私たちと同じような人間の姿。

「ほう…これが人の姿。…悪くは無い。」

グレーの長い髪の毛で、身長は中学生くらい。肌は白く、顔は人形のように綺麗

に整っていた。そして、裸。

「つて服を着てください!!」

「そうか…人となると服を着なければいけないのか。……その男。」

「え、お、俺…?」

化け猫が1歩1歩と裕樹君に近づき、なにをするのかと考える。

服を貸すとの要求? 一緒にお風呂? 昼寝? なにをするの…?

化け猫は裕樹君のシャツを掴むと、そのシャツの中に入り込み、裕樹君との密着度M

AXの状態になった。

その時、いきなりリビングのドアが開く。

リビングに入ってきたのは私の妹の砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>だった。

「ただいま…:…つてええええええええ!!? ちよ、お兄ちゃんなにやって…この変態!!」

「待てこれは誤解だ砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>ああああ!!」

「うるさい…耳を閉じなさいけないじやないか…。」

「ああ…わりい。」

猫耳をペコペコ動かす化け猫。ちゃんと可愛いじやない…。

色々あつてみんなで牛丼を食べて、裕樹君の部屋で裕樹君、私、砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>、そして化け

猫の4人で会議をすることになった。

「それでお兄ちゃん、さっきのことは――」

「だからあれはこの化け猫の野郎が入ってきたからだ！」

化け猫が手を挙げ、ひとつの提案をした。

自分の名前の提案だ。

「私は……化け猫という名じゃない……。だけど、私にはちゃんとした名前はない……。だから、お前らが付けて……」

私たち3人はしばらく悩んだ。雨が降っている中見つけたから【アメ】

牛丼を食べていたから【おぎゅう】

化け猫だから【ぼけにや】

いくつかの提案をした結果この3つに絞れた。

「ちなみにアタシはおぎゅうにするつもりよ。」

砂垂菜は大きく宣言をした。

「俺はぼけにやだな。さすがは俺のネーミングセンス。」

「あんたのネーミングセンスは最悪よ。」

「この2人は仲良くなったのね。良かった。」

「私はアメね。」

「全部1票ずつ……どうするの……。」

「ここでまた悩む。」

「やっぱりここは化け猫のあんた自身に決めてもらうしかないんじゃないかしら。」

砂亜菜の発言を聞いて、しばらく悩む化け猫。

数分経ち、閉じていた瞼を開く。

「そう…なら、おぎゆうで…。」

「やったー！情報提供ありがとね、お兄ちゃん♡」

「くっ…教えるんじゃないかった…。俺の失態。」

「やっぱり、2人とも仲良いじゃん。」

「仲良くない!!!」

ふふ、と微笑むおぎゆうの笑顔を私は見逃さなかった。

今すぐにも…私はこのおぎゆうをなでなでしたい。

裕樹君と砂亜菜は2人で楽しんでるし、今のうちに…。

「その女…名は？」

「伊織よ。」

「伊織…覚えた…。ここは温かいな。」

「そうね、とても温かい所よ。きつとおぎゆうも好きになつてくれると思う。」

「ああ、そうだな。」



「それと、おぎゆう。」

「なんだ？」

「なでなでさせてえ〜!!」

「んにゃ?!にゃあああああー!!!」

裕樹君の部屋におぎゆうの悲鳴がこだましたとき。

## おぎゅうの日常

私は——ぼけねこ化け猫のおぎゅう。

現在、主ぬしの上で寝ている。

「すう……すう……」

「おーい、おぎゅう。起きろー。寝るなら俺のベットでいいから、俺の上で寝ないでくれ、動けないよ。」

「主が動けなくても私には問題ない……」

「俺に問題があるんだよ。」

「仕方ない……私は主の部屋で寝るとする……」

目を擦り、眠いという意識もありながら、主の部屋の2階へと向かう。

主の扉を開けると、主の妹、砂亜菜さあながいた。

「……魚……?」

「砂亜菜よ!猫だからって許してもらえと思うてんの!?!」

「だが……似てる……。それに……眠いからあまり大きな声を出さないでくれ……」

フラフラとしながらベットへ向かい、倒れ込む。

「あんたねえ…休日だからよかったけど、平日だったらアタシたち3人も学校行ってるんだからね?」ご飯とか出来るの?」

「なんだか…ははうえ母上みたいだな…。」

母上…今頃どうしているの…。私は主を見つけたことを母上に報告したい。どこで、なにをしているんだろう母上…。

「誰があんたの母親なんてするもんか!」

「砂亜菜は…厳しいな。」

砂亜菜は何も言わず、ドアを静かに閉めて部屋から出ていった。

静かになったせいか、睡魔が襲ってくる。そのまま私は主のベットで寝てしまった。

☆ ☆ ☆

目を覚ますと、外はまだ明るかった。主によって早寝させられたから昼寝もそこまで長くならなかったのだろう。人間の体になったせいで、人間のような生活を送ることになってしまうのか…。猫は楽だな…。

「ふあく…んにゃ、やばい…:…また猫耳としつぽが…。見られるのは…恥ずかしいから集中しないと…。」

妖力で人間に変化へんげしているため

妖力の効果が弱まると猫化が進んでしまう。

それに、あまり人間の姿で猫耳と尾が生えてるのは色々とめんどろなことになるからな。

以前、主の部屋で見つけた擬人化とやらの本を見てみたらなにかと大変なことになっていたので嫌なのだ。

耳と尾をしまう為、妖力を溜めているとノックの音もせず、いきなり部屋の扉が開いた。

「おーい、おぎゅう。起きろー。さすがにもう起きたよな」

「はにや!?ぬ…主…?こ、この姿は忘れるにやー!!!」

「えっ!?つつか、猫耳……って引っ掻くな痛い痛い! わかった、わかった!今すぐ出て忘れるからー!!!」

バタンと大きくドアが閉じる音が部屋に響く。

もう一度妖力を溜める。

溜める中、私は主にあの姿を見られたことを考えていた。

正直言って、私も一応乙女だ。恥ずかしいものは恥ずかしい。いくら同じ人間の姿だとしても、猫耳と尾が生えているし、きつと人間界じゃ、ああいうものは醜い大人に襲われてしまうものだろう。

まったく…特別に主と2人きりの時だけは見せてやるか。

妖力を溜め終わり、主に声をかけると、ゆっくりとドアが開き、隙間から主の顔が出てきた。

「そんな警戒しなくていいぞ。もう終わった。」

「はあ、良かった。でも、初めて会った時にはあんな風な姿はしてなかったのに、なんで？」

「ああ、あれは妖力の問題だ。あの時は牛丼を食べてなんとかあったが、昼寝をして気が抜けてしまったのだだろう。ついああなってしまった。」

「ほお…天使とか妖怪とか俺の身の回りには色々多すぎるよ。でも、楽しいからいいけど。」

主の笑った……。兄上あにうえの笑顔のようだ。

「ど、どうしたの？そんなぼかんとした顔して…。やべ、なんか俺変なこと言ったか？」

「ふふ、なんでもないぞ。ただ主は優しいんだなと思っただけだ。」

「ま、家の飼い猫だし、一緒に住んでるんだからな。」

☆ ☆ ☆

日が暮れ、月が綺麗な頃。

私は主の姉——伊織いおりとお風呂に入っていた。

「伊織…胸大きいんだな。」

「わお、かなりストレートに言うんだね…。」

「私は……。ないに等しい…。」

自分の胸元を手で擦りながら、伊織の大きい胸を眺める。

感触はいかがなものか。

「伊織…触っていいか…?」

「へっ!?ま、まあ…おぎゅうは女の子だし…いい、いいよ…。」

差し出すように胸を張る伊織。目を閉じ、頬が赤いことから、恥ずかしがっていることがわかる。湯気で少し分かりずらいが…これが乳首か?

恐る恐る指で突くと、伊織の口から「ひゃん」という甘い声が漏れた。

「お、おぎゅう…そんな風に触らないで…。ちよつと恥ずかしい…。せめて触るなら思いつき揉んで欲しい。」

思いつき掴んで欲しい…。なるほど、伊織はMなのか。

「そうか、Mなら仕方ない。思い切り揉もう。」

大きな膨らみにいざ手を伸ばしてみる。それはとても柔らかく、マシユマロのようだった。

それに、指が埋まる。なんとというデカさ…。

欲しい。

「あ、あの…おぎゆう?これ…いつまでやるの?」

「私の…気が済むまで…にや。」

「そう…。」

一体どうやったらここまでなるものか…。

そういえば、どこかで聞いたことがあるのだが、揉まれたら大きくなるという説を聞いたことがある。試しに今夜主に揉んでもらうか。

お風呂から上がり、パジャマに着替えて主の部屋に向かった。

主は椅子に座り、本を読んでいた。

私は焦っている訳では無いが、多少は欲しかったから、すぐに主に事情を話した。

「——ということ、揉んでほしいのだ。」

「ということ…:…じゃないよ!なんで男の俺なんだ!?!」

「きつと伊織と砂垂菜じゃ、私を遊ぶ。だから、主でないと嫌なのだ。」

「そんな…俺は、恥ずかしいし、まずまず女の子のものなんて揉むほどの度胸は——」

パジャマの上着を脱ぎ、上裸になる。

「んなあああ!?!なんで、ぬぬぬ脱いでんの!?!ちよ、今すぐ着て!?!」

「抵抗する主も…可愛い…:…。」

私は主を椅子ごと押し倒し、覆い被さるような形になった。

主の手を取り、自分の胸をへと運ばせる。

「ほら、揉むのだ。揉んで私の胸を大きくさせるのだ。」

主…抵抗しようとして力を入れてる…。

「ちよ、おぎゆう、力強くない?」

「妖力で強くしてるだけ…早く揉んで。」

「だからって無理やり揉ませようとするしないで!」

むむ…主のモノが膨らんでいる…。もしや、貧乳好きか。

「主よ、私とやるか?」

そう言うのと、いきなり部屋のドアが破られ、主から剥がされる。

「お兄ちゃん!大丈夫?」

「さ、砂垂菜…助かった。」

く…主の妹、砂垂菜。どこまで私を妨害するのだ…。

「仕方ない、今日は出直すとする。だが、主、いつでもやる準備をしておくのだ。では、

おやすみ。」

「まったく…あの猫は…。お兄ちゃん!ちゃんとしっかりしてよね。じゃないと…私の

お兄ちゃんじゃないわ。」

「あはは…以後気をつけます。」



その日を境に、毎日おぎゆうが寝込みを襲いに来るのだった。

## ♥ 友と興奮 ♥

初めてあの2人と出会ったのは春の時だった。おぎゆうと会ったのもすぐだった。

俺さとうひろき佐藤裕樹は、今の現状を自分だけで打破できる気がしなかったので、親友

くぜだいすけいすずえるふ久世大輔と五十鈴妖精を含めた3人で話していた。

「んで、その姉妹は前に転校して、ウチに来た伊織っていう子と、3組に来た砂亜菜つてやつだろ？」

大輔は、両親が銭湯を経営しておりその高校を卒業したらそこに就くらしい。運動が大の得意で、筋肉も多いが勉強は下から数えた方が圧倒的に早い。

「僕のクラスに砂亜菜つて人が来た。席は僕の後ろで、転校初日は僕に握手を求めてきたけど、適当に返しといた。」

妖精がヘッドフォンを首に下ろして、スマホをポチポチしながら大輔に続けて言った。

妖精は女子によく間違えられるが、実は男である。銀髪ショートで腕のところ白いラインが入った黒の上着をよく着ている（生徒指導室にとよくちよく呼ばれる）。授業中以外ヘッドフォンをずっと付けているので話を聞いているかわからないが、ヘッド

フォンを首に下ろしたら確実に聞いている。スマホをいじらながら。

「それでさ大輔、妖精。少し俺に案外あるんだけど――」

俺は前に思いついた作戦を2人に話した。その名も、多様性作戦。現代社会で、同性愛なども許されている。だから、この2人に協力してもらって男3人で夜の営み的なことをしてる感じにする。もちろん、親のいない時だよ。

「……うわ、キモ。」

妖精の言葉が1番痛かった…。

肉体的じゃなくて精神的に響く言葉はキツイって妖精。

「協力するのは問題ないんだけどよ、そんなことして俺らにメリットはあんのか？」

「協力するのは問題ないの!？」

「どうした妖精、恥ずかしいのか？」

「そういうことじゃ……」

もじもじするな!男だろ!女みてえなことするな!目覚めるだろうが!

「嫌なら…:作戦を変える。だけど、もしこれ以上出なかつたらこれでいく!」

その後、何度も話し合いを行ったが良い案は出てこなかった。

と、ということ…。

「いざ、決行!!」

「なあ、妖精。俺らつて裕樹の家来るのつて初めてじゃねえか？」

「確かに。というか、まずはあの姉妹が家でどんな服装か。」

「服装？なんでだ？そこまで問題ある事じゃ……はっ！」

「気づいた？もしかしたらだけど、家でラフな格好で裕樹を魅了するような服装だったら、近親そ——」

「それ以上はR—18になるからやめろ。」

「メタ発言もやめといた方が。」

☆ ☆ ☆

裕樹の部屋にて。

「おおおい、お前ら落ち着くぞ……。ききき今日は作戦の決行日だ。マジではしなくていいから、とりあえず声だけでも……。」

「1回裕樹が落ち着いたら？」

「そそ、そうだな……深呼吸。すうーはあーすうーはあー。よし！妖精、やるぞ！」

「僕みたいなの……女の子にそんな大胆に言うなんて……」

トウソク……じゃねえよ！なんで俺は胸がときめいてんだコノヤロウ！こいつは男！大丈夫、きつと大輔も——

「やばい……妖精が女の子に見えてきた。」

ダメだったわ。ここにストツパーがいねえ。どうしよう、これじゃあこの作品がBLになっちまう。

この作品の趣旨が変わろうとした時、部屋のドアがノックされた。

今の状況はまずい…。脱ぎかけてる妖精に俺は覆いかぶさってるし、大輔は息が荒いし…。

「主……入っていいか。私も主の友達とやらに会ってみたいのだ。」

「おぎゆう!? ちよ、ちよつと待ってくれ。」

おぎゆうならきつとストツパー役になってくれる!

そう期待したんだがな……。

「主、この前の続き……しよう。ほら、私の胸を、ぎゅつと…。」

「お、おい妖精! マジもんが目の前で見れるぞ! 一応お前も男なんだから興奮するだろ!」

「まあ…うん。」

やべえ、変質者を呼んじまったかもしれないねえ。

大輔がこんな風になるのは初めて見るな。

昔からの付き合いで、憧れていたけど今の様子には憧れないな。こんな状態が学校にバラされたらきつとあいつは大変な目に…。

だから俺は、これを止めなくちゃいけない！

「おぎゆう！ダメだ！俺たちはそんな関係になっちゃいけない！」

「私はただ…揉んでほしいだけなのだが…。主は交尾を期待していたのか…？」

「あ…そういうえば前は胸を揉んでほしいだけだったのか…ホッ…」

安心したとき、元気になった息子をなんとかバレないようにしていたが、おぎゆうに先端を掴まれた。

「安心してているが、主の…ここは期待しているようだぞ。私は…別にシても構わない…」

心臓の音がよく聞こえる。目の前の光景にドキドキしてしまっている自分がある。期待している自分と罪悪感に包まれている自分もいる。

その時、廊下から「ちよつと待ったー！」という声が響くと同時に俺の部屋のドアが強引に開けられた。

「おや、主の妹の砂亜菜…。」

開けてきたのは砂亜菜だった。

「アタシの…アタシのお兄ちゃんなんだから!!」

砂亜菜の口から大きく放たれた言葉に少し驚いてしまった。

自分が姉妹を嫌っているのに関わらず俺のことを兄だと思っていたと知ると、どこか安心したような感覚だった。

# 突入！学校！

今日も今日とて、新しい姉妹が出来たのにも関わらずいつも通り一人で登校。

それは、俺が姉妹を嫌いだから。家族になつたんだから仲良くしろと思われても仕方がないが、前にも話した通り俺には姉妹が嫌いな理由がある。

それが無くならない限り、俺はあの2人のことを好きにはなれないだろう。

そして今日もいつも通り教室で本を読んでいると、幼なじみの愛が隣ですつと話しかけてくる。

「ちよつと、裕樹ー？また無視？愛ちゃん悲しんじゃうなあー。」

「お前、一人称愛じゃないだろ。」

「あ、やつと返してくれた。」

元気にニコツと笑う愛の表情はどことなく砂亜菜に似ていた。

そう思っていると、愛からあの「姉妹」について聞かれた。

「またかお前は。家でも学校でもそんなに話さないよ。まずまず、幼なじみならわかってるだろうが、俺は昔から姉妹というものが嫌いだろ。」

「そうだねー。でも、あれから時間も経つたし、もう大丈夫だと思っただけだな、私

は。」

「時が癒してくれたら良かったんだがな。」

「時が癒してくれたら、あんな風に伊織ちゃんが裕樹のことを気になってないんだろうな。」

そう愛が言うと、伊織が気になってしまい、そちらに目線を送ってしまった。

すると、愛の言った通りもじもじとした感じで俺を見つめていた。

だが、俺はすぐに読書に戻る。

「あらら、すぐに本読んじやつて。もしかして、伊織ちゃんと熱い眼差しで照れちゃったのかなー?」

「そんなことがあったら今すぐ早退する。」

「主が早退したら…私が…慰めてやろう…。」

愛の横から現れてきたおぎゆうが続けて言った。だが、なぜここにいる。ここは学校だ。

おぎゆうまでここに転校となったら困る…。

毎回寝ている時に裸でベットに入ってくるもんなんだから、同じように学校でもやられたらとんでもないことになるぞ。

「ええー!?何この子可愛いー!」



「んにや、そんな風に撫でるな…。私を…。撫でていいのは…主とその…姉妹だけだぞ。」

「そこに私も追加してよー!」

「今日…初めて会った人を…。撫でて良いと…承認するわけがない。」

ホームルームのチャイムが鳴り、愛は自席に戻りおぎゆうは俺の隣にいたままだつた。

もちろん、先生が来るとおぎゆうは連れていかれしばらくすると先生と制服姿のおぎゆうが来た。

「えー、今日また転校生が来ました。では自己紹介お願いします。」

「よろしく…。お願いします。主…いや、裕樹君のペットの…。おぎゆうです…。」

はい来ましたクラスメイトの痛い視線。

「裕樹君、君は一体この子になにをしているのかな?」

先生がじりじりと問い詰めて来るのが怖すぎる…!確かにペットではあるけどここでは誤解を生むからやばい!

突然椅子を引く音が聞こえ、伊織が先生の元へ向かう。

「おぎゆうちゃんは私と裕樹と共に住んでる方です。ペットというのはおぎゆうちゃん  
の虚言です。ので、裕樹君は別に悪いことはありません。」

伊織は普段学校では真面目で誰からも好かれていいる存在、先生からも変な風には思われてなく、嘘はつかないと思われているのだろう。

先生はすぐに引いてくれた。

後で礼を言うか。

その日は休み時間におぎゆうがずっと俺の膝の上に座っていること以外普通だった。

だが、授業中にわかったのはとんでもなくおぎゆうが勉強出来ないということ。

化け猫ということもあり、人間の勉強に疎いことは予想はついていた。

その日の帰り道、俺と伊織とおぎゆうの3人で帰ることとなり、休日に砂亜菜含め4人で勉強会を開くことになった。

「てつきり俺は妖力で勉強もなんとかなると思つたが、出来ないのか?」

「無理…出来るけど…したくない。めんどうくさい。」

「おぎゆうがやりたくねえだけじゃねえか…。仕方ねえ、一応俺だつて勉強が苦手なわけじゃない。教えられることは教えてやる。」

「それと裕樹君、実は砂亜菜も…色々。」

「は?砂亜菜も?マジか…まあ伊織と2人体制でいけばなんとかなるよ。」

砂亜菜も勉強が苦手とはびつくりだ。あれだけでかい口を叩くもんだから俺よりなにもかも上とは思つたがな。

## 勉強会当日。

砂亜菜とおぎゆうは机でぐったりとしていた。

「こーら、2人ともしつかりしなさい。勉強会するわよ。」

伊織がしつかりしていて助かった。もししつかりしてなかったから俺は部屋に引きこもってるね。

「お姉ちゃん、なんで勉強会なんて開くのよ。それにおぎゆうが学校行くななんて初耳だったのにな。」

「なぜか学校に来てて、色々あつて学校に入ることになったらしいわ。」

「え？でもお金とかは……。」

「主が払ってくれる。」

自慢げに言うな。経済的に俺が死ぬんじや。

「というのは……冗談で……。本当は……主の両親が払ってくれる。」

「それじゃあ、感謝しなきゃね。ということであタシは部屋で感謝するためになにかお礼の物を考え……。」

「砂亜菜ちゃん？なに逃げてるのかしら？」

「お、お姉ちゃん……ひええ。」

おぎゆうと砂亜菜は俺たち2人にみつちり勉強を叩き込まれたとき。

# 構ってくれないならヤっちゃやうぞ☆

今日も今日とて、俺——佐藤裕樹さとうひろきはいつも通り幼なじみ——佐々木愛ささきあいに読書の妨害を  
されていた。

「ねえーねえー、裕樹さーん？いつもこうやっても構ってくれませんが、いつになつたら構ってくれるんですかー？」

「死んだら構ってやる。」

「へえーそれじゃあ…」

ん、いきなり睡魔が…。今日もしっかり寝たはず。くっ…無理だ…寝てしまう。

俺は睡魔に負けてしまい、そのまま机の上に腕を組んだ状態で寝てしまった。

目を覚ますと、学校ではなかった。

周りにはクラスメイトもおらず、自分が読んでいた本も、座っていた椅子もなかった。

ただ目の前にあるベッドを見つめたまま俺は立っていた。

ベッドの上にはYESと書かれたピンクのハート型の枕が二つ。ふたつ

恐らく、アレだろう。だが、俺はそこまで夢に出てくるほどではない。そこまでそれ

の欲は強くは無いはずだ。きつとな。

背後から扉の開く音が聞こえ、そちらへ向くと裸の愛がいた。だが、その背中には黒い羽が生えていた。そこで確信した、人間では無いものだ。

愛のように具現化された何かの生き物か、本当に愛か。

「裕樹が構ってくれなかったから、こうするしかなかったんだよ？」

「愛……だよな？本物の愛だよな？」

「うん、このサキュバスの姿では初めてかな？でも、この姿を人に見せるのは裕樹が最初じゃないんだ。何十人も何百人も、私はその人たちの性欲を食べてきたんだよ。」

ほう……サキュバスか。前に天使と来て、今度はサキュバス。

正直あまり驚きはしない。

それは表情と行動にも出ていた。

「ええ!?裕樹が驚かない!?そんな……。」

「まあ、新しく出来た家族が天使だから。それに、前に来たおぎゆうだつて化け猫だから。もうそういうので驚くのは慣れたぞ。」

「くっ……だけど、私のHのテクには驚くんじゃない……？私のここに入れたら、即イキするんじゃない？」

愛はそう言いながら、自分の陰部に指を指す。

その指は、そのまま陰部の中へと入っていく。

愛は俺の目の前で自慰行為じいこういを始めた。

いやらしい音、愛の喘ぎ声、陰部から溢れてくる液体。

俺はその光景から目を外すも、俺のアソコは元気だ。

視界の端で愛がこちらに近づいてくるのが分かる。きつとここで俺は卒業する。高校卒業の前に、ここでひとつ卒業してしまう。だが、それもいい。いや、ダメかもしれない。

「ここでしてしまつたら、あの姉妹になんて説明をすれば…。」

「伊織いおり…砂亜菜さあな…頼む…助けてくれ。」

つい、思っていたことが口に出してしまう。

その言葉は愛にも届いていて、俺の目の前で動きを止めた。

「やっぱり、その二人だったのね。でも、奪えばいいよね。死ぬまで搾り取ってあげるからね☆」

愛が俺のズボンを下ろし、俺のアソコを咥えようとした時。頭の上に白い羽根が乗る。その時に、初めて砂亜菜と会ったことを思い出した。

角でぶつかり、俺の頭の上に砂亜菜の羽根が乗ったこと。なぜか蹴られ、治療してもらったこと。

砂亜菜、もしここにいるなら

「このバカ兄貴。」

俺をここから出して、また治してくれ。

☆ ☆ ☆

砂亜菜に助けられ、放課後に伊織と砂亜菜と愛と俺の合計4人で、会議室でこのことについて話し合うことになった。

伊織は不満げに、砂亜菜は少しこりっぷく立腹だった。

「お姉ちゃん！またこのサキユバスだよ！それに前と同じようにやろうとしてた！」

「砂亜菜、落ち着いて。前にも何度かあったけど、今回も同じね。対象も。」

「どうやら、二人は愛がこのようなことを元々知っていたようだ。となると、二人がここに来る前にも愛と関係があったと。中々気になるぞ。」

「愛、今ここでは【サキユア】と呼ぶわね。」

「え？そつちで呼ぶの？そつちの名前はあまり好きじゃないのに…。」

「文句言わないこの兄貴をまた食べようとした性欲サキユバス！」

「サキユバスは性欲を食べるのが義務なんですうー！」

砂亜菜と愛は仲があまり良くないようだな。

まあ俺は実際この会話についていけてないんだが。

というか、いつから砂亜菜は俺を【兄貴】と呼ぶようになった？

砂亜菜が愛との口喧嘩で、ぷいっとこちらを見た時に、手招きで呼んだ。

「なあ砂亜菜。いつから俺を兄貴と呼ぶようになった？」

「あ、えっ、えーつと…それは、漫画の読みすぎで…。」

「そうか…。」

「なに？お兄ちゃんの方がいいの？」

「いや、砂亜菜が呼びたいように呼んでくれれば俺は構わない。」

俺的にはお兄ちゃん呼びがいいが、校内でそう呼ばれたらクラスメイトからの視線が痛い。

もうこれは二度も経験してるからわかる事だが、中々キツイ。

「おやおやー？二人で密会なんて、ずるいな〜。」

「げっ、サキユア…。」

「なにが、『げっ』よ！昔から【サナ】は変わってない！」

サナ…。今の流れるに砂亜菜の天使名てんしなだろう。

「ていうか、サナのお姉ちゃんは名前言わないなんて卑怯ね。せつかくなら全員の名前を裕樹に覚えてもらわない？【イオ】？」

姉妹の姉の伊織はイオ。妹の砂亜菜はサナ。

幼なじみの愛はサキユア。



ということか。つい覚えてしまった。

よく人名は覚えてしまうのだが、中学の時にある女子を呼ぶ時に名前で呼んで、気持ち悪がられた経験があるため、それ以降あまり覚えることはしていないのだが、友好関係を築いてしまったがため覚えてしまった。

「お姉ちゃん！とりあえずサキユアにこれからああいう行動をやめてもらうようにしよう！」

「そうね。でも、抑制するためにはあの子の力が必要ね。」

「あの子？もしかして「エル」？」

その名を愛が聞くと、即座に嫌そうな顔をした。

「ええ…エル？あの子に縛られたら何も出来ないじゃない！縛りプレイも悪くないけど。」

「そういうところよ！この変態サキユア！」

「サキユバスですか？」

「うるさい！変態！」

今日も元気ですね、この三人は。

ちなみに言うとな俺は。ただ椅子に座ってその風景を眺めているだけでした。

## 認められたい

「んにゃアアアアアア……?!?!」

朝の7時にとある化け猫の叫び声で起こされた。

原因は伊織。朝っぱらから化け猫——おぎゅうの布団に入り、抱き枕のように抱きしていた時、おぎゅうの急所に入り、強烈な朝のアラムが来たらしい(?)

今日も今日とて、佐藤家の朝は騒がしい。

☆ ☆ ☆

放課後。

コンピューター室に俺——佐藤裕樹さとうひろきと姉——伊織いおりと妹——砂亜菜さあなはいた。

そして何故か俺は椅子に座っている妖精えいふの前で土下座をしていた。

それはなぜか。数時間前に遡る。

昼休み中に屋上で伊織と砂亜菜含めた3人で昼食を食べていた。

実は砂亜菜はまだ中学2年生である。だがなぜここにいるかと言うとこの学校は中高一貫校である。だが、高校の屋上に中学生は立ち入り禁止である。何故いるかは正直

俺にもわからない。

「それで、今日の体育の持久走の時に男子が胸をよく見てきたのに気づいた時は冷や汗が止まらなかったよ〜」

「仕方ないよ、お姉ちゃんのそのたわわは男にとって欲望の塊だろうからね。ね、裕樹？」

「なぜ俺に聞く!?!」

砂亜菜はいじわるな顔で俺に問いかける。

まるで悪魔のようだ。こいつ本当に天使なのか？

「悪魔みてえな顔しやがって。本当に砂亜菜は天使なのか？初めて俺と会った時なんて俺の顔面蹴ったじゃねえか。」

「はあ!?!なにアタシが悪いみたいない方してんのよ!あれはあんたがアタシのパンツ見たからでしよ!?!」

「前方不確認のお前が悪い。俺は決して悪くない。普通大丈夫か確認するために相手を見るだろ。」

「前をちゃんと見てなかったのはあんたもでしよ!」

「ちよ、ちよつと2人とも…落ち着いて。」

「伊織（お姉ちゃん）は黙ってて!」

その後も俺と砂亜菜は口喧嘩を続けていた。

伊織は時々止めに来るも、すぐに弁当を食べることに戻ってしまふ。

そんな中、静かにこの会話を聞いている者がいた。

「まったく…うるさいな。ヘッドフォン越しでも聞こえるんだけど。」

周りを見ても声の主はいない。

「どこ見てんの裕樹。上だよ上。」

言葉の通りに上を見ると、そこには白い翼の生えた人がいた。

この人も…天使なのか？つか、なんで俺の名前知ってたんだ？

「あー!!エルちゃん!お久しぶり!!」

「だから…砂亜菜が一番うるさいんだけど…。」

「エルちゃん」と呼ばれた人が地に足をつける。

最初は太陽のせいで顔がよく見えなかったが、降り立った時、俺は絶句した。

「よっ、裕樹。まさか友達が天使だとは思わなかったでしょ。」

彼女の名は、いや間違えた。彼は五十鈴<sup>いすず</sup>妖精<sup>えいふ</sup>。高校に入学してから知り合ったが、彼

が天使だとは一切知らなかった。

後で大輔にも……

「ちよつと裕樹。大輔<sup>だいすけ</sup>には確認はしないで。唯一僕が天使だって知ってるのはこの2人

と裕樹の3人だけなんだから。」

あれ、今思考読まれた？

「わ、わかった。俺たち以外の人には秘密にしておくよ。」

「ところで…」

妖精が腕を組み、プルプルと震える。小便漏れそうなのかな。

「なんでここに中学生が立ち入っている!!」

「「すみませんでしたー!!」」

そして現在に至る。

俺たち3人は妖精の前で土下座をしている。

妖精は風紀委員会副会長に務めており、1年フロアの風紀をほぼ完璧に保っている。

「まあ、今回は初めてだから多めに見るけど次からは本当に怒るからね。」

「す、すみませんでした…」

砂垂葉が深々と頭を下げる。それを見て、俺と伊織も同じように頭を下げる。

「それじゃあ、もう各教室に戻っていいよ。その代わり砂垂葉は気をつけてね。高校生のフロアに中学生がいるなんて、先生に見つかったらめんどくさいし。」

「た、確かに…でも、見つからずになんて難しくない?」

「だったら…君のお兄さんについて行ってもらった方がいいんじゃないかな? 妹が高校

フロアに来ていたので、しっかりと帰るように送ってますって裕樹が言えばどうにかなるんじゃない？ね、裕樹？」

「なんで俺に押し付け——」

「ね？裕樹？」

「はい、わかりました…。」

妖精ってこんな怖かったつけ…。

俺たち3人は立ち上がり、コンピューター室を出ようとした時に妖精が思い出したかのように言った。

「そういえば伊織、砂亜菜。2人ともさ、裕樹に自分たちが天使かってちゃんとかわれる？」

そう問われると、2人は黙っている。

確かに俺も2人は家に住み込む姉妹と名乗っている2人（姉妹と認めたくない）と思っっている。

天使らしいことを俺にしたのは、砂亜菜の治療くらいだ。

「天使は天使として、しっかりと認めてもらう。それは父上に教えてもらわなかった？それに、君たちは特殊で裕樹と婚約する予定なんだから。今は姉妹として、次は恋人として、その次は妻として。そして、天使として認めてもらわなければ意味はない。認めら

れることで僕たちの存在意義が達成される。」

「婚約」という言葉を聞いて、俺は耳を疑った。

伊織と砂亜菜に真実か問いかけるも、2人は首を横に振らない。

「裕樹、君は……………いや、これはまだ言わないでおこう。」

「それ言わないならさっきの婚約の話も言わないで!!」

砂亜菜が顔を赤くしながらも素早くツツコミを入れる。だけど、その顔は姉妹でなく女の子としての顔に近いものだった。

俺は2人を姉妹として見ることから初め、次に恋人として見なければならぬと言っ  
のか。

先程の言葉を嘘とは思えない。

だが、今のところ。俺が2人をどう思ってるかと言うと……………。

ただ話しかけてくるだけの女の子たちなんだ。

仲良くしようって意思が伝わってくる。俺もそれに応えようとする気持ちはある。けど、俺は…姉妹以上の関係を持たなければいけないのか……………。



## Acknowledge you

婚約…か。姉妹という存在が嫌いな俺にとって、この2人を姉妹として、恋人として見なければならなくなってしまった。

意識してしまうと、つい2人の顔から視線を逸らしてしまう。

だが、いきなりそんなこと言われても、俺も…伊織いおりと砂亜菜さあなも困ってしまうだろう。

2人は元々そのこと知っていた上で俺と話していたとしても、結局は苦難の道。俺がまだ姉妹とすら認めていないからな。

「あ、あのさ…」

沈黙の中、最初に口を開けたのは砂亜菜だった。

「その…アタシたちはゆつくりいこうと思ってるから、お兄ちゃんも、ゆつくり慣れていって…ね？」

もじもじしながら言う砂亜菜はまるで乙女おとめ。

恥ずかしかったのか、すぐぶいっと視線を逸らしてしまった。

伊織はずっと黙ったままだ。

この重い空気を閉ざすかのように昼休み終了のチャイムが鳴った。

砂垂葉は走って中学の方に戻り、俺と伊織は教室に戻っていった。

午後の授業の内容はなにも入ってこなかった。

昼休みのことではいっばいになっていた。

誰と婚約するか、なぜこんなことになっているのか、うちの母親はこのことを知っているのか、これからの生活はどうなるのか。すべてそんなことで頭の中が埋め尽くされていた。

ノートはあとで家に帰って伊織に見せてもらうか…。

そう思った時、肩をつつかれた。つつかれた方を見ると愛あいがいた。

「裕樹さ、昼休みからずっと考えてるけどどうかした？性欲せいよくごとその悩み吸あってあげようか？」

「実はさ——」

今日の昼休みに起こったことを1からすべて愛に話した。

愛はしばらく考え、一言放った。

「まずは姉妹として認めたら？」

「それが出来たら良かったんだがな…」

「裕樹は昔からなにかを引きずりすぎなんだよ。昔にあつたこと、今の裕樹の姉妹は違うでしょ？伊織ちゃんや、裕樹の妹ちゃんは、裕樹のトラウマと同じじゃない。もう

乗り越えていいんだよ、2人は裕樹を認めてくれる。絶対に。」

昔からそうだった。いつも何事も愛に背中を押される。運動だって、勉強だって、何が引つかかっていることを愛は理解している。俺のすべてを見透かしているように。

「ありがとう、愛。俺、なんか無性に2人と話したくなってきたよ。」

「幼馴染に任せればどうってことないよ!」

ニカツと笑う愛に感謝をする。

この恩は忘れない、必ず返す。

そう決心し、教室を飛び出た。

「はあ…いつも私は裕樹を助けちゃう。私だって、裕樹に認めてもらいたいのにな…。」

私も…裕樹好きなのにな…。」

☆ ☆ ☆

荒々しく玄関のドアを開け、リビングに向かう。

「あら、裕樹。そんな焦ってどうしたの?」

「母さん!伊織と砂亜菜は!どこにいるの!!」

「え、2人はここにいますけど…」

母親が指差す方向を見ると、心配そうな顔をした伊織と砂亜菜2人がいた。

「ど、どうしたのお兄ちゃん、そんな焦って。」

「なにか相談事ならお姉ちゃんに頼んでもいいのよ。」

「えつと…その、ここじやあれだ！俺の部屋にしよう！」

俺は2人の手を掴み、自分の部屋へ連れていく。

2人をベツトに座らせ、土下座をする。

「本当に今までごめん！今まで、俺は2人に良い態度をしてこなかった。良い弟として、良い兄として、過ごしてこなかった！だけど、そんなことは昔に引きずられてた弱っちい俺だった。昔のことなんて、抱えてきたトラウマなんて2人には関係ないのにそれを2人に写して見ていた俺が馬鹿だった！俺はずつと…2人に悪いことをした…：…：  
本当に…：ごめん…。」

俺は震えた。俺は泣いた。俺は怖かった。俺はここまで自分が正直だと思わなかった。

だけど、俺は今までにない程に震えている。

悲しさか、嬉しさか俺にはわからない。

そして、今俺は2人の顔を見ることを出来ない。

「お兄ちゃん…もう顔上げていいよ。」

そう言われるも、俺は上げなかった。俺には今2人に合わす顔がないから。

「裕樹、気持ちには伝わったよ。私たちにそんなことを思っていたなんて初めて知った。

私からも謝らせて、この前強引みたいに話させようとして。」

「アタシも……最初は話してくれた」なんて傷つけてかもしれないのにね。アタシたち天使なのに、傷つけてたんだもん。言葉は怖いよ。お兄ちゃんも今思ってる通りアタシも怖い。だけど、アタシたちは天使。」

俺の背中に暖かい手が乗る。2人の優しさに包まれた手が。

「だから、治療なほしてあげる」

俺の体全身が、包まれていく。あの時と同じ、砂亜菜に蹴られた時と同じ緑色のオラのようなもの。

心が軽くなる。俺の不安がなくなっていく。

俺のトラウマが、2人に重ねていたトラウマがなくなっていく。

ありがとう、伊織イオ、砂亜菜サナ。2人が居てくれて、俺はすごく嬉しい。姉妹としてくれていてくれてありがとう。

「ありがとう……2人とも。」

俺は顔をあげ、2人に抱きつく。

「これで私たちも天使として……姉妹として認めてくれたかしら。」

ホッしたかのように伊織が言う。

「ああ、認めたさ。2人は俺にはとって大事な家族で、姉妹だ。」

この時、俺は胸が高鳴っていた。

この日の夜。裕樹の部屋にて。

「お兄ちゃん〜！姉妹として認めてくれたんだからさ、今日くらい一緒に寝ない？」

「……………は？」

「えっ、ちよ、なに怖いんだけど。」

「砂亜菜…順序つてもんを考えろ!!やっぱお前ら姉妹嫌いだ！俺は姉妹と一緒に寝たくねえ！高校生になって姉や妹と一緒に寝るか！この姉妹は、この2人はやはり嫌いだ!!俺の大嫌いな家族だ!!」

「あれ、順序つてことは、段階踏めば一緒に寝ていいつてこと？」

ギクツ。やべ、俺は間違えて順序つて言ってしまった…。今から訂正するのもあれだしな…。

「勝手にしろ。お前ら姉妹がどうしようがお前らの勝手だ！ただし、拒否するがな。」

「はあぁー!?やっぱアタシもお兄ちゃん嫌い！」

そんな会話をドア越しに聞くお姉ちゃんの伊織であった。

抑えていたこの気持ち、まだ応えられない。

日曜の朝。

いつもの通りのパンと目玉焼き、ベーコンとサラダが出てくる。  
主の母親特製のものだ。これらはとてもおいしい。

そして、おいしそうにこれら頬張る。そんな姿を見つめている。

「おぎゆうちゃん、私の特製の牛丼はいかがかしら？」

主の母親は頬に手を当てながら聞く。

「とても… おいしい…。いつも… ありがとう…。」

「あらあら、嬉しいわ。」

「本当におぎゆうは牛丼が好きなんだな。今日の昼、ファストフードの牛丼を食いに行  
くか？」

それを聞いて、不意に猫耳が出てしまった。

主の素晴らしい提案…… 乗るしかないにや。

だが、さすがの私も朝昼の連続で牛丼は少しきついかもにや。

「裕樹、さすがに連続で牛丼は厳しいんじゃないかしら。」

「そうだよな……さすがにおぎゆうでもきついよな。今日じゃなくても、いいもんな。  
ご馳走様、ありがとう母さん。」

「お粗末様でした。」

主がお皿を片付け、洗い始めた。

洗ったお皿を置く音だけがリビングに響く。

「ねえ、裕樹。伊織いおりと砂亜菜さあなどこにいるか知ってる?」

主の母親は思い出したかのように言った。

「さあ、俺は知らない。」

母親は次に私の方を見るが、私も知らないのです、首を横に振る。

「そう……」

すると、母親がいきなり私の方に詰めてくる。

「ねえねえ、おぎゆうちゃん。今日こそチャンスじゃない?」

最初は何を言っているかわからなかったが、話を聞いていくごとにだんだんと思いついてきた。

その話は約1週間前、主が愛あい(主の幼馴染)に襲われかけた日の夜のこと。

☆☆☆

主と、天使の姉妹が寝た後、私は中々寝付けずにいたので、水を飲もうと冷蔵庫に向



かっていると、リビングのテーブルと向き合っている主の母親を見つけた。

「あ……寝てないんですか……。」

「ああ、まだ仕事が終わらなくてね。大丈夫、心配しないで、ちゃんと休憩はとってるから。」

「そうですか……。いつもあり……がとう。」

「いえいえ。」

……いつもお母さん大変そう……。私のお母さん、今大丈夫かな。早く見つけなきゃ。

考え事をしていると、主の母親から話しかけられた。

「ねえねえ、おぎゆうちゃん。実は裕樹がさ、幼馴染の愛ちゃんに襲われかけたって話を聞いて思いついたんだけど、この前おぎゆうちゃん裕樹に胸触らせてたじゃない？ それってかなりどきどきするはずなのね。それと同じようなことを二人きりで出かけるときするのよ。そしたら、おぎゆうちゃんが裕樹の嫁になれる日も遠くはないわよ。」

それを聞いてその時のことを思い出してしまい、赤面せきめんしてしまった。

「あ……あれは、確かにしましたが……かなり思い切ったことでしたので……さすがに外は少し恥ずかしい……です……。」

「あら、そうなの？ 裕樹から聞いたときはお母さんもびつくりしちゃったわよ。おぎゆ

「うちゃんもそこまでやるかってね。」

私は赤面、そしてその顔を見つめてくるお母さん。すると、お母さんが「あつ！」と声を出した。いきなり出されたものだから驚いてしまい、コップに入った水をこぼしてしまった。

「あら、大丈夫？まっつて、今タオルとつてくるから。」

タオルを取りに行つたお母さんを待つ中、私はあのことについてまた考えていた。

さすがに外ではできないけど、家の中だつたらいいかもしれない……。いやいや、でも、あれやるの結構勇気いるんだから。妖力ようりょくで気を散らせばなんとかなるけど、寝れなかつたら妖力溜められない……。

うーん……。主と二人きりで出かけるか……。そんな機会できるかな……。

☆ ☆ ☆

まさかその機会があまり遠くなかつたとは思わなかつたなあ……。ふふ、主とデートく。楽しみだにや〜。

「主、そ、そのさっきのお昼行く……。ふあ、ふあーすとふーど？行く……。」

「そうか、なら行くか。だつたら、伊織と砂垂菜を昼までに呼ぶからちよつと待つ」

私はあの二人の名前が出てきてほしくなかつた。私は主と二人で行きたい。

私は

「主と二人で、デート… がした… い…。」

「で、ででデート!? おぎゆうと…。」

ふと、主の母親の方を見ると、腕を組んで頷いていた。

「わかった、俺もそれなりに準備するから。」

主はそう言い、ドアを静かに閉めた。

ドアが閉まってからすぐに主の母親が私に飛びついてきた。

「よくやったわね、おぎゆうちゃん！二人きりで行くこと私から提案しようかなって思ってたけど、自分から言ったわね！これは大きな成長よ！」

「は… はい…。」

私は主を誘った直後にあることが頭に過よぎっていた。

それは——洋服のことをまったく考えていなかったのだ。

「お… お母さん、その… 洋服どうすれば… いい？」

「洋服ねえ…。そうね、私に任せなさい!!」

主の母親は自信満々に言い、私の手を引っ張って、自室へと連れ込んでいった。

今日の昼。

最寄りの駅に集合ということにして、主には先に待つてもらった。

「ひ……裕樹……！」

周りの人がいるため、緊張していたが、勇気を振り絞って声をあげた。

私の声は周りの音にかき乱されて聞こえなかったらしく、主は反応していなかった。

駅の壁に寄りかかっている主のもとへ向かう際に、妖力を使って気配を消して、いきなり目の前に現れるということを思いついた。

そして、これを決行した。

「ふふ……。主はどういう反応するのかな……。」

ふっと影のように主の目の前に現れる。

「うお！おぎゆうか……。びっくりした……。てつきり愛かと思った——」

主の口到人差し指を置いて、一言放つ。

「今は、おぎゆうのことだけを……考えてください。他の……女の子の名前は出さない  
てください。」

「わ、分かった……。それと服に合ってるよ……。」

主の母親監修かんしゅうの洋服だ。

白のワンピースに麦わら帽子というものをかぶっている。

正直主に似合っていると言われてうれしい。

「じゃあ……一緒にいっしょ。」

主と私は二人隣で歩く。少し歩いてから、私は主の手に私の手を伸ばす。

手と手が触れ合うと緊張してしまつて握れなかった。だけど、主が私の手を握つてき

た。私はそれに応えるように握り返す。気づけば、それは恋人つなぎになっていた。

「今度は……私から主の……裕樹の手を握るから……。」

そう言うと主は顔を赤くする。

「おぎゆうは、あの二人と比べたら好きだ。」

……私はその時返事することができなかつた。

## 恋心と響いた声

朝の話題にもなっていたふあすとふーど、というものを目の前にした。

それはもう、とても美味しいそうで……。私は我慢できずにすぐに食べだしてしまっ  
た。

「あはは、本当におぎゆうは牛井好きなんだな。」

口の中に入った牛井を飲み込み、水を飲む。

「う、うん……。それに、これ、すごくおいしい……。」

「そっか、それはよかった。」

また牛井を食べてるときに、主ぬしの食べている牛井が目に入った。

食べたい……。

と思いつつ、ずっと見ていると主が察したのか、食べるというように、牛井を私の方  
に差し出す。

主が食べている牛井は「ねぎたま牛井」というもので、私の食べている普通の牛井と  
はかなり異なっていた。

「食べる？」

「うん……」

私は口を開ける。

主は何をしているかわかっていないようで、しばらく私の顔を見つめていた。

「むう……。主。わからないの……？」

「うーん、もしかして――」

主が自分の牛丼をスプーンですくい、私の口に運んだ。

「こういうことかな？」

「私が聞いたのは……。さっきのと、あーん、というものが……。あるって聞いたんだけど……」

「え、あ、ああ……」

主が再び牛丼をスプーンですくう。

主は周りを見渡すと、周りからの視線が刺さっていること気づいた。

私は主が持っているスプーンに口を持っていく。

「あーん」

ぱくっ。

うんうん……。おいしい。

「あ、あれ。おぎゆう食べちゃったの？まあ、いいけど……」

「今度は……。私の番……」

私は主のように牛丼をスプーンですくい、主の口に運んでいく。

「はい、主……。私の牛丼……。あーん……」

「あ、あーん。」

主は恥ずかしくなりながらも私のスプーンを口の中に入れる。

「うん、美味しい。やっぱり普通の牛丼も美味しいね。」

「そう……。だね……！」

このあと、食べ終わり主と店内から出た。

私は店から出たときに気づいてしまった。私と主が間接キスかんせつきすをしてしまったことを。

「ん？どうしたおぎゆう？」

「い、いや……。その……。な、なんでもない……。！」

私はつい恥ずかしくなり、その場から逃げ出してしまった。

気づけば知らない所において、私は近くにあった公園のベンチに座っていた。

「なんで私……。逃げちゃったんだろ……。主に迷惑かけつちやてるよね……。戻りたいけ

ど、ここ……。わからないし……」

妖力ようりよくを使うときは猫耳が出ちゃうから外ではあまり使いたくないし。

どうしよう……。



「ねえ、ここぞでなにしているのお嬢さん？ 困ってるならお兄さんが聞こうか？」  
「だ、誰？」

「お嬢さん一人だから危ないでしょ？ だから俺たちが守ってあげるってこと。ついていて、安全なところに連れていあげるから。」

手を掴まれる。怖い……。この人たち主みたい優しくない人たちだ…。

「ちよつと無視しないでよ、いいことしてあげるから。」

「い、い…や…。」

「え？ なんて？ 大丈夫安心して、俺らが守るから。」

怖い…。怖い怖い怖い…。

怖いから…逃げなきや…。

私のお母さんが言ってた、危ない人にはついていかないでって。

でも、力を使わなきや、逃げられない…。妖力なしじや、逃げられない。

「おい、このガキ全然来ねえ。おい、あれ使え。」

後ろから細いものが刺される。

後ろを注射器ちゅうしゅうきが首の裏に刺さっていて、どんどん意識が遠くなつていった。

だけど、意識が遠くなる中である人の声が響いた。

その声が私の中で、響いたとき目が覚めた。

目が覚めたとき、私の周りにいた男の人達は全員倒れていた。

「おぎゆうー——!!」

主の声が聞こえ、そちらの方へ走る。

「ぬ、主〜!!」

「あ! おぎゆう!!」

私は主に飛びつき、泣いてしまった。

「いきなりどっか行っちゃったからびつくりしちやっただよ。次からはしないでね、心配したよ。」

「ごめんなさい……。その、さつき変な男の人たちに囲まれて……。怖かった……。」

「そう、よく逃げたね。よかった。ほら、涙拭いて。」

主はポケットからハンカチを取り出し、私に渡した。

涙を拭いて、主に返した。

「ありがとう……。主。」

「いえいえ、じゃあデートの続きしよっか。」

「うん……。!」

私は心の中である一つの疑問が浮かんでいた。

なぜ私は妖力を使ってないのにあそこから抜け出せたのかがいまだにわからない。

それに、あの時に聞こえた声、なんて言ってたんだろ。

そんなことを思いつつも、主のデートをそのあとも楽しんだ。

私に合う洋服を見つけてくれたり、からおけ？というもので歌ったりしてとても楽しかった。

帰り道。

私は主に聞いた。

「ねえ主。また今日みたいにデートしたい。」

「うん、俺も。また時間空いてるときにね。」

風と足音しか聞こえない。この沈黙の中、私は妖力を開放して、本来の姿——猫耳としつぽが生えた姿になった。

「ねえ、主。こつち向いて。」

主は私の方を向く。

「私はさつき逃げたとき……間接……キスだから恥ずかしくなって……逃げちゃったのでも、今日の中で……決心がついた。」

私は主に近づき、主の口に私の唇を重ねる。

「私は……あの伊織と砂亜菜に……負けない。主と私は絶対に……ずっと一緒に……いる

!!  
」

私は口づけしたことにまた恥ずかしくなり、先に家に戻ってしまった。  
このことを主の母親に話すと、「キヤー！」と乙女のように叫んでいた。

## 素直な気持ち

おぎゅうとのデートの翌日。

昨日のキスのことに少し信じれていない自分もいる。

そんな中、朝から俺の部屋騒いでいる妹がいる。

「ちよつとお兄ちゃん!?早く起きて!聞きたいことがあるから早く起きてー!」

「うるせえよ。こつちだつて疲れてんだよ。:。」

「じゃあいいわここで話すわ。昨日おぎゅうちゃんとデートしたらしいじゃない。」

「あ、あああれか。確かにしたけど。それがなにかどうしたの?」

俺そう言うのと、妹の砂皿菜が顔を赤くし、いきなり怒り始めた。

「んなつ?!、そんなこと、つて言った?女の子にとつてね!デートは特別なものなのよ

!!!」

と俺の部屋の椅子に乗せてるクッションを俺に投げつけ、部屋のドアを大きな音を立てて出て行った。

「相変わらずうるせえな。:。そういうところが嫌いなんだよなあ。:。」

朝ごはんを食べるため、髪を少し整えて、リビングへ向かう。

向かう途中、用を足そうとトイレの扉を開けると、中にはおぎゆうが入っていた。

「お、おぎゆう!? ご、ごめん!! そういうつもりはなかったから!!」

「主… もしかして、交尾こうびをしたいのか…?」

「んなつ、何言つてんだ! そういうつもりはないから! それにそういうのはお互い大人になつてから!!」

「むう…。」

なんかおぎゆう「むう…。」っていうのハマつてない?

おぎゆうがトイレから出てきてから俺は入り、用を足してリビングに行った。

「あら、裕樹ひろき。おはよう。」

「おはようお母さん。」

お母さんの挨拶に続いて砂亜菜が挨拶をする。

「ふん。おはようお兄ちゃん。」

「ああ、おはよ。」

朝のこともあり、砂亜菜は機嫌が悪くなっていた。

席について、目の前にいた姉の伊織いおりに挨拶をする。

「伊織、おはよう。」

「おはよう裕樹。そういえば、おぎゆうとデートに行ったんでしょ?」

それを聞いて砂亜菜がピクリと動く。

俺が答えようとしたとき、おぎゆうがいきなり現れ、俺より先に早く答える。

「そうだよ…。私と主、その…。き、キスしたんだから…。！」

おぎゆうがそのことを恥ずかしそうに言った。

「はあー!? おぎゆうちゃんが抜け駆けー!? くうー!!」

「砂亜菜、落ち着きなさい。」

「でも、お姉ちゃん。アタシたちが先にする予定だったのに、負けちゃってるんだよ? アタシたちも少しは焦らなきゃ。」

「そうね。」

俺は友達の妖精えりふからこの二人のお父さんから俺と婚約するためにここに来たという話を聞いた。

そのため、この二人は俺を取り合ってるわけだが、俺はそれが嫌いだ。好きでもない人と婚約させられても、いやだろうし、俺はこの二人が嫌いだ。なんならおぎゆうの方が好きだ。

そう思い、おぎゆうの方を見ると、なぜかおぎゆうはふふん、と胸を張っている。

「いいわ、おぎゆうちゃんがその気なら。お兄ちゃん! 今度はアタシの番よ! 今度の土曜日、アタシと…。その、で、デートよ!!」

「砂亜菜：：頑張ってる！！」

おぎゆうが小さく頑張れとポーズを決めながら言った。

「ライバルのあんたに言われるとなんかいやね：：。まあ、いいわ。アタシもアタシで、全力を尽くすから。絶対に負けないわよおぎゆう！！」

土曜日。

砂亜菜とのデートの日。

おぎゆうと同様に駅で待ち合わせをしていた。

俺が駅に着くより砂亜菜は早くついており、俺を見つけた途端俺に近づいて俺の目の前で止まった。

何か言えと言わんばかりに表情が怖い。

だが、服はジーパンに白シャツの上に革ジャンを着ていた。

「：：服。」

「え？」

「だから！服が似合ってるかって聞いているのよ！」

「は、はい！似合ってます！」

緊張して噤んでしまった。



「… ふふ、なによ。まふ、つて。」

「あはは、つい嘸んじやった。」

「お兄ちゃんらしいわね。さ、行くわよ。」

砂亜菜はファッションに興味があるらしく今日は俺をモデルに色々服を試すらしい。

俺はショッピングモールに連れていかれて、流行りの服、かつこいい系の服、ロック

系の服など様々な服を着させられた。

「ふう、やつぱりあんたいつも通りの服が似合ってるわね。あんたの服の感性かんせいにアタシ

が首を突っ込む必要はないわね。」

「じゃあ、今度は俺が砂亜菜の服選んでもいいか？」

「別にいいわよ、アタシの服はアタシが選ぶわ。」

俺の服の権利はないのかな。

「… でも、一緒にまた出かけたときにはいいわよ。」

すると、近くにいた女の子に話しかけられる。

「あー!!砂亜菜じゃん!これが例のお兄さん?」

どうやら友達のようなのだ。

「うっさいわね!今日はアタシのモデルになってもらってるだけで、決して一緒にいた

いわけじゃないから!」

「相変わらず砂亜菜はツンデレだねー。これじゃお兄さんも大変でしょ。ねえ？」  
と俺に共感を求めてくる砂亜菜の友達。

「まあ。大変つちや大変かな。だけど、今日に関しては砂亜菜がデー——」

デートと言うときに砂亜菜が俺の口を手で塞いできた。

「おおう？これはお兄さんからの言質取げんちっちゃうか？いや、お兄さん、MマIイNイE交換し  
ません？」

「ちよーだめよー！」

「別にいいでしょ？私が交換したいだけだし。別に砂亜菜の邪魔になるようなことはないから。」

砂亜菜は少し考えたあと、アイコンタクトで良いと俺に伝えてきた。

俺は砂亜菜の友達にスマホを渡す。

砂亜菜は機嫌が悪そうだ。

砂亜菜の友達が俺に手招きし、俺は耳を貸した。

「安心して、知ってると思うけど、砂亜菜はツンデレ。対応とかわかりずらいと思うから私がサポートするね。よろしく。」

そう言われると、スマホを返され、その友達は足早に去っていった。

「もう、さっちーめ……。」

「さつちー」というのはおそらくあの友達のことだろう。

「こりやまた面倒くさくなりそうだなあ。」

「さつちーからなにか変なことされてない?」

「なにもされてないよ。」

「そう、ならよかった。アタシはあんたが嘘つかないことはわかってるから信じる。」

「信じられてるならよかった。」

「それとお兄ちゃん…いや、なんでもない。今日の夜部屋で待っててね。」

砂亜菜の言う通り、夜に俺の部屋で待っているとコンコンとドアが叩かれる。

「どうぞ」と言うと、砂亜菜が部屋に入ってきた。

「お兄ちゃん、そのいつも言葉きつくてごめん。その、なぜか素直になれなくてね…。」

「どうもちゃんと言葉にできないの。」

「そんなことない、むしろあのくらいが砂亜菜らしいと思う。」

「え、なに? あんたDM?」

「いや、そういうわけじゃないけど。ただ、逆に素直すぎると砂亜菜っぽくないから。時々素直になるくらいがちょうどいい。だけど、俺はまだ伊織と砂亜菜のことをあまり好きじゃない。けど、最近は認めつつある。」

「そう。なら、さっきお兄ちゃんが言ってたし今くらいは素直になろうかな。」  
砂垂菜が俺に近づいてきて、俺を押し倒し、唇を重ねてきた。

「じゃあね、アタシの、お兄ちゃん」

## 特別編：ある日の会話。

砂垂菜さあなとのデートの日の夜。砂垂菜が裕樹ひろきの部屋から出た後の話。

さっちー『お兄さん（、・∨・）ノヨロシク。そういえば、自己紹介してなかったよね。あたし、さっちーって呼んで。友達からもそう呼ばれてるし、あたしもあたしでさっちーの方がいい。』

裕樹「了解。知ってるかもしれないけど、俺は佐藤裕樹さとうひろき。よろしく」

さっちー『それで、デート終わりなにかあったりした？』

裕樹「夜に俺の部屋で……。いや、言うのなんか恥ずかしいな。」

さっちー『ほう？これはこれは、砂垂菜も大胆だいたんに攻めていくんだね〜ニヤニヤ』

裕樹「まだ何されたとは言っていないだろ？」

さっちー『私は察さつしいがいいことで有名なので！（＾＾）！。』

裕樹「その名譽めいよ欲よしくねーな。」

さっちー『ていうか、お兄さん怒おこってる？』

裕樹「いや、そんな感じじゃないが、なんでだ？」

さっちー『なんか文体ぶんたいが起おここってるように見えるからさ。フツー、最後に絵文字とか

ついたりしない？こんな感じに（＾＾）』

裕樹「めんどくさいし、そういうもん使わないしな。」

さつちー『えー!?使わないの!?今や珍しい：：。今じゃそんな人中々そんな人いないよ。』

裕樹「そうなのか：。だけど、いいよ俺は。俺のことは普段からそういうのは使わない人だと思っていて。怒ってるときは言つとくから。」

さつちー『はいはい〜』

会話が終わり、スマホを閉じる。

閉じた瞬間、スマホが鳴り始める。

砂亜菜『ねえ、あんた。さつちーとMINEで話してたんだって?』

裕樹「ああ、確かについさつきまで話してたな。」

砂亜菜『さつきアタシがしたこと：：。言っていないよね?』

裕樹「さつきしたこと?」

砂亜菜『もしかして忘れたの?ついさつきのことじゃない、アタシのファーストキスだつてのに。』

裕樹「あ、あああれか!いや、あれはされると思ってたし、本当にあれは驚いたよ。」

砂亜菜『それで、さっちーには言ったの？言っていないの？』

裕樹「言つてないよ。あんなこと簡単に人には言えないよ。」

砂亜菜『そう。ならよかつたわ。』

はあ……。まさか人生初めてのデートでおぎゆうと帰り道にキスされて、今日砂亜菜とデートして、その夜に俺の部屋で俺のことを押し倒して、キスされたし。

もしかしたら伊織いおりとかからも……

いや、なにを考えてるんだ。俺は。

「主。」

「うわあ!？」

いきなりおぎゆうが目の前にいた。

「私も主と…… M I N E 交換したい……。」

「もちろん、いいよ。」

おぎゆうからスマホを預かり、M I N E を交換した。

交換できたことを確認すると、おぎゆうは足早に出て行った。

すると、おぎゆうから M I N E が来た。

おぎゆう『ぬし みえる ? 』

裕樹「ああ、見えてるよ。」

おぎゆう『これ どうやってうつか あまりわからない』  
今度、おぎゆうにスマホの使い方教えてやるか。



## あなたの気持ち、気づいてくれない私の気持ち

砂亜菜さあなとのデートから数日後。

学校での昼休み中に俺の周りは騒がしくなっていた。

「主。私と校内：。回らないか？」

「ねえねえ、お兄ちゃん。今日の放課後アタシのファッションの手伝いまたしてくれないか？」

「ねえねえ、裕樹ひろきく！」

この通り騒がしい。このせいで俺はクラスの中でも浮く存在になってしまった。

周りからの視線がとても痛い…。

「てゆうか、おぎゆうちゃん。あんた、昨日の夜お兄ちゃんの布団にもぐりこんだらしいわね。」

「ああ、そんなこと… 日常茶飯事にちじょうさはんじ…。」

「んなつ、日常茶飯事だつて？ ちよつとお兄ちゃん!! どういうこと？」

昨日の夜…。昨日以外の夜も侵入されてるけどな…。

というか、おぎゆうに関してはデートしてからのアピールがものすごいんだよなあ。

「俺に聞かれても、勝手におぎゆうが俺の寝てる間に入ってくるから俺はどうもできないし、起きたときにおぎゆうが気持ちよさそうに寝てるから中々俺も断れないんだよ。」  
「んじやあアタシから断るわ。おぎゆうちゃん、アタシの、お兄ちゃんが寝てる間に忍び込むのやめてくれない?」

「ふん… 主は私のだ。砂亜菜に私の行動の決定権はない。」

「そう、なら勝負ね。」

「ここ最近。ずつと砂亜菜とおぎゆうがバチバチです。助けて。俺の生活が過ごしずらくなってるからとてもいやだ。」

クラスの男子からはこの二人がいないうちに俺は色々いちゃもんつけられるし、おぎゆうはうちの学校に来てクラスの中で人気だし、砂亜菜は昼休みにここに来るからうちの高校の男子から人気だ。

そんな二人に毎日囲まれてる俺。

だが、こんな状況を打破<sup>だ</sup>して<sup>は</sup>くれるクラスのマドンナがいる。

「ちよつと、砂亜菜。おぎゆうちゃん。裕樹が困ってるでしょ?それにそろそろ時間も時間だから砂亜菜は学校に戻りなさい。」

「はい。わかったよ、お姉ちゃん。」

そう、そのマドンナは俺の義理の姉——伊織<sup>いおり</sup>だ。

「さすが姉。人間でも天使のような癒し」――

おぎゆうの口を砂垂菜が塞ぐ。

――天使のような癒し。これは比喻ではなく、本当のことだ。

伊織と砂垂菜。この姉妹は天使。そして、おぎゆうは化け猫という妖怪。

人じゃないのが多い……。

学校のチャイムが鳴り始める。砂垂菜がそれに気づき、急いで教室を出ようとしたとき、ヘッドフォンを首にかけた女の子のような男の子。いわゆる男の娘と呼ばれる類の俺の友達――五十鈴妖精いすずえるふがいた。

彼は風紀委員副会長で、よくここに来る砂垂菜を取り締まっている。

「こら、砂垂菜。早く自分の学校に戻って。授業に遅れるよ。」

「あ、エルちゃん！お久々。」

「その名前で呼ぶなー!!」

廊下が騒がしくなっている中、おぎゆうはしぶしぶ自席に戻っていった。

伊織はなにか言いたそうにしていたが、先生が来たため自席に戻っていった。

放課後、下駄箱げたばこで靴を取り、置くと、伊織に声をかけられた。

「ねえ、裕樹。」

「ん、なんだ伊織。」

「その、砂亜菜とのデート楽しかった？」

「ああ、俺が連れまわされてたに近いかな。」

それを聞くと、伊織は「ふふ」と笑った。

「そうね。それは砂亜菜らしいわね。」

沈黙が始まる。お互い靴を履き、一緒に歩き出す。

先に口を開いたのは、伊織だった。

「ねえ、裕樹。このまま私とデートしない？放課後デート。」

「へ？」

「へ？じゃないわよ、言葉通り。私と放課後二人きりで遊ばないってこと？」

「それはわかってるけど…。まさか伊織からも言われるとは思ってなかった。」

俺はしばらく返事ができなかった。俺は考えていた。この前に妖精が言っていた

「こんやく婚約」というワードが俺はずっと気になっていた。

「まさか、この前にエルちゃんと言ってた「婚約」が気になってるんでしょ？私たちが、

裕樹のことを好きじゃないのにデート誘ってることに疑問を持つてるんでしょ？」

伊織は俺の思考を読み取ったかのように。

「ああ、その通りだ。俺だって好きじゃない人とデートしろって言われても俺は必ず抵抗が生まれる。」

「ねえ、裕樹。いつから私たちが裕樹のことを嫌いだと思ってるの?」

「だって…。俺は伊織と砂亜菜二人のことを好きじゃないし、婚約したいとも思っていない。だから――」

「それは裕樹の気持ち。私たちの気持ちはそうじゃない。裕樹のことを私たちは…。私は、砂亜菜は、おぎゆうは。あなたのことが好きなの。今は付き合えなくても、姉がいい。私は負けないから。だから、あなたの彼女になる最初のステップを踏むために今日のデートに付き合ってほしいの。そして、あなたの気持ちを変えて見せる。」

俺の気持ちを変えて見えるか…。そう簡単には変えられないと思うけど、今日限りはこの話に乗るか…。

「ああ、今日だけな。俺は嫌いだが、みんな平等にな。とりあえず一回ずつデートは受ける。」

俺は伊織とのデートに出かけた。

「ねえ、裕樹。最近学校の帰り道に新しくできたクレープのお店ができたから一緒に食べに行かない?」

「ああ、もちろん。いいぞ。」

伊織についていくと、キャンピングカー型のクレープ店だった。

開店サービスとしてカップル限定で半額サービスが行われていた。

「カップル限定の半額サービスか……」

「ちようどいいじゃない。さき、早く食べましょ。」

家にいるときの伊織とは違い、今の伊織はまるで乙女のようにすっかり女の子していた。

伊織も普通の女の子だもんなあ……。そりあ当然か。

「ていうか、まさかこれの半額サービスを狙ったわけじゃないよな？」

「さあ？ どうなんでしょう？」

伊織も策士だなあ……。

そして、カップルの証明として、店員さんの目の前で恋人つなぎすることでこのサービスが適応されるらしい。

よくアニメとかであるキスとかじゃなくてよかった……。

俺は安堵あんどしつつ、伊織と恋人つなぎを店員さんに見せた。

「こんなものを見せるだけでも緊張しちゃうな。」

「そうなの？ じゃあ、これは？」

と伊織が言うのと、伊織は俺と唇を合わせ始めた。

それを店員さんの目の前でやるもんだから、後ろにカップルとかも、驚いちゃってるし、店員さんも同様。

「ふふ、どう？クレープ前の‘彼女’からの甘い甘いキスは？」

「…クレープの方より甘かった…よ。」

このキスのおかげでクレープがひとつ無料でもらえた。

その後、このクレープ店では、キスすると、おまけで無料でもう一つクレープがもらえるという噂が立つようになった。

「ふふ、あの噂。私たちのせいかな？」

「たぶんそうだ。ていうかあれ写真撮られてネットに流されてたらしい。」

「ええ!?私と裕樹のラブラブ度ばれちゃうじゃない。」

「そっちなよ…。」

俺の部屋でそんなことを話していると、砂亜菜とおぎゆうが部屋に押し寄せてきた。

砂亜菜がスマホを俺たちに見せながら言った。

「ちよつとあんたたち!?!これどうということよ?」

「あら、噂をすれば…」

「そう…。その通り…。」

「新しくできたクレープ店でカップル限定でキスをする無料クレープをひとつ無料っていうのを見てさらに調べたらこんな写真出てきたんだけど?」

「せっかく主と…二人きりで行こうと思ったのに…。」

「今回は私に取ったわね。遅れてるのは砂垂菜だけよ?」

「くうー!アタシだって負けてないんだから!!!」

この日の夜。

俺のベットには俺以外にもおぎゆうと、砂垂菜と伊織がいた。

緊張しすぎて俺は寝れなかった。



## 誰も知らない

頭の中に昔によく聞いたことのある声が響いた。

「おぎゆう。おぎゆう。あの力を。ずっと封印ふういんできると思ってるのか。」

「ん…。あなた、誰…？」

「お前がよく知る人だ。」

目を開くといつももの天井だ。

「ほんと…。誰なんだろう…？」

最近の夢はほとんど同じだ。主ぬしとのデートの時に聞こえた声が夢で響いている。

そんなことを考えていると、ドアが突然開く。

開けた人、私の主——裕樹ひろきだった。

「おぎゆう？うなされてたけど、大丈夫？」

「え…。そうなの？」

私は前までリビングのソファで寝ていたが、最近の主との親睦しんぼくを深めるために毎日主と共に寝ている。

どうやら、あの夢の影響でうなされているようだ。

「ああ、それに最近毎日だ。最近なにか悪いことでもあった？」

「……いや、特にない……よ。」

「なにかあればすぐに言っつていいからね。」

学校にて。

私は休み時間中に屋上にいた。

そろそろ次の授業が始まるというのに私は戻る気がしなかった。

なぜなら、夢で響いてくる声の正体がわかった気がしたからだ。

母上<sup>はほうえ</sup>……。私は今の生活がいいです。なのに、なんでそんなに私をそこへ戻そうとする

のですか？

私は昔のようにはなりたくないです。

もうあんなことはしたくないです……。

あの力はもう使わないと約束したのに……。

『おぎゆう。私の言うことを聞きなさい。今の妖怪の世界にはあなたが必要なのです。』

「いやだ、私はここにいたい……。」

『ここであなたの力を解放させましょうか？ そうすれば、ここにいる人たちはほとんど  
の人が大きな被害を受けますよ。それでも、言うことを聞きませんか？ あなたの大事な

主<sup>も</sup>……場合によっては死にますよ。』

それは……。絶対ダメ……。

でも、断ればこの学校のみんな危ない。なら……。

「わかった。私は・母上についていきます……。」

『よろしい。ならここに転送するわ。』

私の足元に円が描かれ、穴が空く。

私の記憶はここで途切れている。

平凡な朝。

俺にはある姉妹しまいがいる。

伊織いおりと砂亜菜さあなという天使の姉妹だ。

俺はつい最近この二人とデートの話を持ち掛けられ、ほぼ無理やりに連れていかれた。

そのデートから数日後の学校。

「ねえねえ、お兄ちゃん。今日の放課後アタシのファッションの手伝いまたしてくれない？」

昼休みに俺の教室に来る妹の砂亜菜。

ほぼ毎日ここに来るため俺の友達——五十鈴妖精いすずえいふから注意されている。

そして彼は風紀委員会副会長だ。

そんな彼が俺に放課後に妖精えいふが俺に変な質問をしてきた。

「おぎゆう？誰だ？それ。」

「え？本当に覚えてないの？」

「覚えてないというかまず知らないんだけど。」

「そんな……。」

妖精は目を丸くしていた。

「なあ、妖精。疲れてんじゃないか？」

「それはそつちの方でしょ!? あんな子を裕樹が知らないわけない……。伊織も砂亜菜も知らなかった。なにかおかしい。」

妖精とは途中でわかれ、俺は家に向かった。

「はあ……。今日の妖精なんか変だったな。」

☆ ☆ ☆

裕樹が知らないわけない。おぎゆうとのあんな日々を送ってるのに……。

僕は自分でこの原因を調べた。

前に裕樹から聞いた話によると、おぎゆうは妖怪の一種の化け猫ばけねこというのを聞いた。天使が妖怪の世界に干渉することはできない。

となると、神様の力を借りて強行突破きやうこうとつぱするしかない。

僕は神様の力を借りて、無理やりに妖怪の世界へと突入し、おぎゆうを探した。

その世界はまるで地獄のよう。

「一つ目の鬼や、おそらく死んだ者と思われる魂が食事とされていたり、普段の生活からは想像もできないものだった。」

「この中におぎゆうがいるの…？」

「なんてとこで育つただ…でも、妖怪の中じやこれが普通なんだよね。」

「ん？なんだ人間がいるじゃねえかア。」

「おや、これはこれは。中々なべつぴんさんですなあ。」

「一つ目の鬼と、おじいさんが話しかけてきた。」

「この中で当たり前のように生きれていることからこのおじいさんも妖怪の人なんだろう。」

「僕は男だよ。そして、僕はおぎゆうって子に用があるんだ。」

「ああ、おぎゆうかア。そいつはアあのし——」

「一つ目の鬼の口を杖で強引に塞ぐおじいさん。」

「あんた、おぎゆうに用があるって言ったね…なら、わしについてきな。」

「そう言われ、僕はおじいさんについていった。」

「お主、「嫌」という漢字の由来を知ってるかい？」

「ついていく中、おじいさんが僕に言った。」

「いえ、知らないです。」

「両手をしなやかに重ねて、ひざまずく女性の象形しやうけいと、並んで植えられている稲の象形と手の象形の二つ。この二つから、心が二つにまたがって安らかではないことを意味している。そこから成り立つたんだ。」

「へえ。」

「この意味わかったかな？ おぎゆうはこれから摘つままれる存在。つまり――」  
命を摘つままれる。つまり、死。

「そんな… なんて？」

「ここを救うため… とでも言うておくか。」

救うため…。 大いなる力には大いなる責任を伴うという言葉があるが、おぎゆうには、この世界を救えるほどの大きな力があるということかも知れない。

「おじいさんは… おぎゆうがここを救えることを知ってたんですか？」

「いいや…。 おぎゆうの真の力を知るのはおぎゆうの両親のみ。わしはただの情報屋だよ。色々とコネを使って知っただけさ。わしには止めることも何もできん。」

大きな城を目の前にしておじいさんは立ち止まった。

「ここからは命の保証はないぞ？ それでも入るかい？」

「はい。僕の大事な友達のためです。」

裕樹がおぎゆうと話してる時の顔を、失うことなんてできない。

僕は意を決してこの大きな城の中に入った。



## 帰還

大きな城を目の前にしておじいさんは立ち止まった。

「ここからは命の保証ほしょうはないぞ？それでも入るかい？」

「はい。僕の大事な友達のためです。」

裕樹ひろきがおぎゆうと話してる時の顔を、失うことなんてできない。

僕は意を決してこの大きな城の中に入った。

城の中はとても物静かで、ここにおぎゆうがいるとは思えなかった。

少し進むと階段が見えた。

僕は誘われるかのように、その階段を上って行った。

何分経つただろうか……。もう何段上ったかわからない。

終わりらしきものが見え、上りきると、大きな猫がいた。

「ふっふっふっふ……。まさかここまで来るとはなあ……。それに、私の妖力が効かない

とは、なにかの不具合ふぐあいか？」

これが正真正銘しょうしんしょうめいの化け猫……。

「そう怖い顔しないでよ……。私の力が効かなかった初めての人なんだから……。」

「あなたがおぎゆうのお母さん？」

「ええ。」

そう言いながら大きな猫は人の姿になっていく。

「どうやら、私の娘のおぎゆうに用があるじゃない……。あなたが先ほど言っていた、裕樹、という人のため……。なんて人は面白いんでしょう。自分の心配だけしていればいいのに……。今、あなたはこれからおぎゆうの餌えさになる。この意味、わかる？ あなたはおぎゆうがこの世界を救うための第一歩としてその命を頂戴ちょうだいするのよ!!」

「はあ……。さっぱり言ってることがわからない。この世界を救うため？ だったらあなたが犠牲ぎせいになりなさいよ。」

「さあ、行きなさい。おぎゆう!!!」

どんとと僕の目線は高くなる。先ほどの大きな猫の……。2倍以上の大きさの猫が出てきた。

これが……。おぎゆうなの？ なんとしても取り戻さなきや……。

「えい!!」

必ず僕はおぎゆうを裕樹のために取り戻す!!!

☆ ☆ ☆

今日も妖精えいふは学校に来なかった。

俺——裕樹は学校に来ない妖精の家をほぼ毎日通っていた。でも、妖精は家にもいない。あいつはひとり暮らしで、あいつ以外に家に誰かがいることはない。

「はあ……。なんであいつは今日も来なかったんだろ……。なんか言ってくれば俺だって手伝うのに……。」

妖精の家に着き、ベルを押す。

……

反応はない。

ドアノブに手をかけると開いてることに気づいた。

開けてみるとそこは今まで見たことのある妖精の部屋ではなかった。

燃える地面。一つ目の化け物。

この世では見られないような者がその場には広がっていた。

「なん……。だこれ……。」

どういうことだ？なんで妖精の部屋がこんな風になってるんだ……。

ていうか、この化け物たちはいったいなに者なんだ……。

すると、後ろから老人の声が聞こえた。

「おや？君もおぎゆうを助けに来たのかい？」

驚きつつも、その声の方向に体を向ける。

「な、なんなんだあんたは!? それと……今おぎゆうって言ったか?」

おぎゆう……。なんか妖精も同じことを言ってたな。

でも、おぎゆうって。なんか聞いたことあるような、ないような……。

「おや? あの子……。帰ってきよった。まさかあの女王を打ちのめすとはねえ……。」

あの光景が映っていた方へと向き直すと、妖精ともう一人誰かがいた。

「はあ……。はあ……。はあ……。や、やあ裕樹。ほら、君の大事な人——おぎゆうだよ。」

妖精の肩を借りている人がこちらに顔を向ける。

すると、その人は俺を見ると顔がパツと明るくなり、妖精の肩から離れ、俺に抱き着

いてきた。

「ぬ、主!!」

猫耳としっぽ。俺のことを主と呼ぶこの子……。

——主は私と交尾したいのか?

——あの二人には……負けない。

——そう言っていた子が俺の近くにいた。

伊織いおりと砂亜菜さあなに恋愛面で敵対視していた人物。

化け猫の……。おぎゆう。

なんで忘れてしまったんだろう。忘れちゃいけない、家族のひとりだったのに。

俺の大事な家族。あのとき、伊織が雨の日に拾った猫から化けて牛丼が好きな人型の妖怪。

「おかえり…。おぎゆう。忘れててごめん。」

「大丈夫だよ…。主。私も母上の指示に従ってるだけだった。私も…。自分で考えて…。行動することをこれで知れた。」

「成長したんだな、おぎゆう。」

俺はおぎゆうを抱きしめた。それに応えるかのようにおぎゆうはさらに強く俺の体を抱きしめた。

妖精が少し笑いつつ俺に話しかけた。

「まったく、僕に感謝するんだよ？僕がこうしなきゃおぎゆうは帰ってこなかったんだから。」

「ああ、ありがとう妖精。」

そう言うと、妖精は俺の後ろに視線を向けた。

それを俺は感じ取ると、首だけを動かして後ろを確認したが、あの老人はいなかった。「実は、あのおじいさんも妖怪の人なんだよ。」

俺は妖精からそれを聞いて「ええ!？」と大きく声をあげてしまい、妖精の隣の家の人

がドアを開けてこちらを確認してきていた。

「ちよつと、裕樹。声でかい。ここの壁って案外薄いから気を付けて。」

「は、はいいい……。て、ていうかおぎゆう？だんだん強くなつてないかい？」

実を言うと、さつきからおぎゆうの抱きしめる力が少しづつ強くなっているのだ。

「そう……。？私からしたら普通なんだけど……。」

「ちよちよ痛い痛い!!!」

体が軋きしむむ音が俺の中で響いた。メキメキツという嫌な音が鳴る。

その音がおぎゆうにも聞こえたのか、力を緩める。だが、おぎゆうの形は変わらない。

妖精がぼそつとなにかを言う。

「ん？妖精なんて言った？」

「いや、なんでも？それと、おぎゆうおなか減つてるっぽいから牛丼食べさせてあげな。」

「ああ、そうする。」

「それと、裕樹。あの二人との「婚約」の話。ちゃんと、決めてね。」

くっ……。それに関しては触れてほしくなかった……。

## 特別編：帰還の夜

おぎゆうが帰ってきた日の夜。

23:00

砂亜菜『いやーまさかおぎゆうちゃんを忘れちゃうなんてね〜』

伊織『ほんと。お姉ちゃんもびっくり。』

裕樹「ああ、まさか妖精えゐるふだけが覚えてるとはな。だけど、なんで妖精だけ覚えてたのかな？」

おぎゆう『多分：・母上の妖力まよりよくとの：・相性だと思う：・。』

伊織『へえ〜そうなのね。だから覚えてたのね。』

裕樹「正直、俺は俺で普通の人の生活とかけ離れすぎてて怖いんだが。」

砂亜菜『なに言ってるのよ、会った初日からアタシのパンツ見たくせに。』

裕樹「はあ!? あれはお前が曲がり角でいきなり出てきたからだろ?」

砂亜菜『いいや、あんたがいきなり出てきたのよ。アタシが被害者ひがいしやなんだから。』

裕樹「んなわけあるか。前方不注意ぜんぽうふちゆういが。」

砂亜菜『あんたそれ言わないでよ!! 今から部屋に行くよ!?!』

裕樹「別にいいが？ただしお前の嫌いなものを仕掛けておくがな。」

伊織『はいはい、もうやめて。それにもう遅いんだからもう寝ましよ？』

砂亜菜『伊織……主のお母さんみたい……。』

裕樹「それは同感だ。家に二人母親がいるみたいで。」

伊織『悪かったわね、お母さんみたいで。』

裕樹「い、いや……。その冗談。」

伊織『とりあえず寝ましよ。』

00:17

砂亜菜『起きてる人いますか？』

おぎゆう『ノ』

砂亜菜『あんた……。もうネット民なのね。』

おぎゆう『ネットは面白い。色々……。ネタが転がってるからな。』

砂亜菜『てか、アタシたち明日学校だけど、こんな時間まで起きてて大丈夫かな？』

おぎゆう『私は大丈夫。妖力を使えば……。』

砂亜菜『中々妖力は便利なものね、アタシもそういうのあれば、よかつたんだけどねえ。』



伊織『あんたたち、うるさいんだけど。ずっと私の携帯がピコピコ鳴ってるんだけど。明日学校なんだから早く寝なさい。』

砂亜菜『はい』

おぎゆう『は〜い〜』

ありがとう伊織……。俺もこの通知のせいで起きたんだ。

砂亜菜『てか、思ったけど、既読4になつてない？』

おぎゆう『もしかして……。主も起きてる……。？』

裕樹「伊織と同じ理由でな。俺も通知で起こされた。」

伊織『ほんと、困るわ。とりあえず早く寝ましょ。』

砂亜菜『はい』

おぎゆう『は〜い〜』

裕樹「うい」

伊織『おやすみ。』

ふう……。これで快適に眠れる。ありがとう、伊織。

4 : 26

おぎゆう『おはよう、みんな。起きてる？』

おぎゆう 『返信がない……。まだ起きてないのか？』

おぎゆう 『そういえば……。前にネットで見た「スタ連」っていうのをやってみるか……。』

ピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロ  
ピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロピロ

裕樹 「うるせえ!!!」

## ひとつ目の借り

おぎゆうが戻ってきて、学校でも家でも今まで通りの雰囲気だった。

「主<sup>ぬし</sup>、ノート貸して。」

「はあ……。この前に課題ちゃんと終わらせとけつて言つたらろ？」

「だって、めんどくさかったから……。」

俺はしぶしぶながらもおぎゆうにノートを渡した。

「ありがと……主。」

おぎゆうが自分の席へと戻っていくと、肩をポンと叩かれ、そちらの方へと顔を向ける。

「やっぱり優しいな。私の幼馴染<sup>わがなじみ</sup>は。」

俺の幼馴染——佐々木愛だ。

「うるせ。俺のことを襲おうとした奴が何言つてんだ。」

「うっ……。そ、それはまた別の話じゃない？」

「なにが別の話だ、まあ現状もうしてこないからいいんだが。」

朝のHRのチャイムがなり、愛は席へと戻り今日の高校が始まった。

☆☆☆

「あ……。弁当忘れた……。」

ポケットの中から財布を取り出し、小銭を確認する。

65円……。うまあ棒5本しか買えねえじゃねえか。

困ったなあ……。さすがに伊織いおりとかに言うのもなあ……。なんか変な感じになりそうだからやめとこ。

おぎゆうは妖力まじまじでお金を生成して違法とかになりそうだし、砂垂菜さあなは絶対貸してくれないからなく。

そうなる……。。

俺は教室の隅で集まっている女子グループの方を見る。

愛か……。くつ、行くしかねえ。

俺はなるべく不自然にならないようにそこへと向かった。

大丈夫だ、俺なら大丈夫だ。だって謎に姉妹ができ、猫が人になり、家にJKが3人いるわけだ。

俺なら大丈夫だ。

そう心の中で唱え、いざ決心して話しかける。

「愛、弁当忘れたから」

「うっさい黙って、たらし。」

愛の友達からそう言われて本気でへこんでしまった。

はあ……。確かにそうか。周りから見たらそうでもないな。

教室から出て、一人でとぼとぼと歩く。

数歩歩くと、朝の時と同じように肩を再び叩かれる。

「またか……。愛だろ。」

「にしし、あたり。」

「ここじゃあれだから、屋上で話さない？」

俺は愛の提案に乗り、屋上で話すことにした。

屋上には誰もおらず、ただ風だけがここにいた。

ていうか、屋上には天文部てんもんぶ以外入れないはずだが。

「なあ、愛。なんで屋上に行けたんだ？お前が鍵持ってたし……。」

「うーん、秘密。」

「……んで、話して？」

愛は屋上のフェンスに近づき、手をかける。

今……。愛は何を考えてるのだろうか。

俺はつばを飲んだ。風と謎の緊張を感じる。

「愛は俺の方へと振り返る。」

「お金、貸してあげる。」

「…は？」

「いや、は？じゃなくて、言葉の通り。」

「いや、別にここで言わなくてもいいだろ!!」

俺が少し声を荒げると、愛は一步引く。

「なによ、せつかく私が優しい気持ちで言っただけだ。」「

「まあ、その言葉に甘えるがなあ…。」

「よし、じゃあこれで貸しーね!!」

「うん、ありがと。」

愛と共に屋上から離れ、食堂へと向かった。

俺らがそこに着いたときにはあまり人はいなかった。

恐らく食べるのが遅い人や、ずっと話してる陽キャならいた。

「んで、裕樹ひろきはなににする？」

「うーん…。」

上に貼られたメニューを眺める。

カレーうどん、焼肉弁当、そば、天ぷら…。

これは奢り……。自分の好きなものを食べてもいいはず。  
愛の方へ視線を向ける。

「ん？」

うーむ、どうしよう。なんか罪悪感ざいあくかんが……。このメニューの中でまあまあ高価の方に  
属しているカレーうどんを頼むのは少し気まずいぞ……。

「もー、裕樹遅い。遠慮しないでいいから。」

くっ、そういうならやってやる……！

「なら、カレーうどんで。」

「はい。」

愛はお代を出す。

愛は「席に座つてていいよ」といい、俺は言われたとおりに近くの席に座つて愛を待  
た。

しばらくすると、愛がカレーうどんを持ってきてくれた。

「はい、お待ち。食堂特製のカレーうどんです。」

「ありがとう。」

箸を割り、いたたぎますをしてうどんを口に運ぶ。

自分がすすする音と話し声が俺には聞こえていた。

「どう? 美味しい?」

「ああ、うまい。食堂のカレーうどんの味だ。」

「なに当たり前のこと言ってるのよ。」

愛から飯へと視線を戻す。

麵にはカレーの風味が染み込んでおり、ルーの濃い匂いが鼻から内部に進んでいく。

全身に染み渡る香り。

幼馴染からの奢りという罪悪感。

このふたつを噛みしめながら今日の昼食を食べる。

そう思いつつ、気づいたらもう完食していた。

「ふう、ご馳走様。」

箸を置き、カレーうどんの入っていた容器と共に指定の返納の場所に返す。

「幼馴染に払ってもらった罪悪感を感じつつ、食べきれてえらいえらい。」

そう言つて愛は俺の頭の方に手を伸ばし、なでようとする。

「今度返す。必ず。」

俺は愛の手を振り払いつつ、そう言った。

食堂から出て、教室に向かう。

次の授業は数学だったっけ……。



「数学だよ。」

俺の思っていたことが分かっていたかのように愛は答える。

「そうか……。ありがと。ていうか、なんでお前俺の考えてることわかったんだ？」

愛と二人で並んで歩いてしたが、この質問と同時に俺は動くのを止める。

愛は少し前に行き、止まった。

そして、こちらに振り向く。

「ふふ、秘密。強いて言うならサキユバスだから？」

愛は唇に指を当てながら言う。

愛はそう言うのと、早足で教室へと向かっていった。

俺はその後ろ姿を今日の感謝と共に眺めていた。

## 急病

季節は夏。

前年より、猛暑もうしょとなる日が増え、ほぼ毎日のようにニユースに取り上げられていた。

「はあく、いい加減熱くなるのやめてほしいねえ……。こんなんじや枯れちまうよ。」

俺は部屋で冷房の効いた部屋でそんなことをつぶやく。

どうやら、この暑さのせいで熱中症ねっちゅうしょうになる人も多いらしく水分補給をしろと死ぬほど聞いた。

「ぬ、主ぬし……。」

「お、おぎゆう!? どうした!?!」

おぎゆうは俺の座っているベットにしがみつぎ、ばたんと倒れている。

も、もしかして熱中症か!!

まずい、そうなるとまずは水を飲ませなきゃいけない。

……。で、でも妖怪って水あげればいいのか。人間と変わらないのかな。

わからん。どうすれば――。

俺はこのとき、思い出す。

俺と砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>が初めて出会ったときのことを。

あのときは俺は思い切り蹴られたあとに、砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>に治療されて起こされたことを。

人間じゃないし、砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>に聞こう!!

そう思い、俺は砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>の部屋へと走り出した。

砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>の部屋の扉を思い切り開ける。

思い切り過ぎたせいで扉が嫌な音したけど、これでおぎゆうは大丈夫だ。

と、部屋に入ると、砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>タオル一枚だけの姿だった。

「んなつ!!部屋入るならソックくらいしなさいこの変態!!!」

砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>のビンタが俺の頬を襲い、土下座をして事情を説明した。

「そういうことね。わかったわ。おぎゆうの状態をすぐ見るわね。」

ホッと安心したが、砂<sup>さ</sup>亜<sup>あ</sup>菜<sup>な</sup>からの視線はとても痛い。

部屋に戻ると、おぎゆうは最初見たときよりも苦しそうにしていた。

息が荒く、頬は赤い。熱があるようで、やばそうな状況だった。

「そうね、とりあえず水をあげましょう。それと、濡れたタオルを。」

俺はそう言われ、すぐに水と濡れたタオルを準備した。

おぎゆうを俺のベットに寝かせ、水を飲ませてから濡れたタオルと額にそつと置い

た。

「：： お兄ちゃんがいなかったらおぎゆう危なかったかもね。ありがと。すぐアタシに相談してくれて。」

「ああ、俺と砂亜菜が初めて会ったときのことを思い出してな。きっと砂亜菜なら治せるんじゃないかなって思ってた。」

「そんなこと覚えてたの?：：。ちなみにアタシのパンツの色覚えてんの?」

：：。白。って言えるかよ。

「い、いや覚えてないかな。」

「ふうん、嘘ついてるようにも見えるけど。まあいいわ。しばらく様子見て、おぎゆうが楽になってきたらなにか作るわ。」

そう言って、砂亜菜は俺の部屋を出ていった。

俺はおぎゆうへと視線を向ける。

先ほどよりか楽になったように見える。

俺は椅子に座り、学校の課題を進めた。

数時間後、おぎゆうを目を覚ました。

「ん：：。主：：?」

「お！体は大丈夫か?」

「うん……。もしかして主がやってくれたの？」

「いや、ほとんど砂亜菜がやってくれたよ。」

「そうなんだ……。いっぱい、お礼しなきゃ。」

おぎゆうはベットから立ち上がり、砂亜菜のところへ行くこうとしていた。

「ちよ、おぎゆう。まだ治ったばっかだしゆっくりした方がいいと思うぞ。」

俺はおぎゆうの手を掴み、ベットへと引き戻した。

すると、俺とおぎゆうの会話に気づいたのか、砂亜菜が部屋に入ってきた。

「おぎゆう、状態はどう？」

「たぶん……。大丈夫。」

「そう。ちよつと様子見るわ。」

砂亜菜はおぎゆうの前髪を上げ、砂亜菜の額とおぎゆうの額を当てた。

「まだ熱はあるわね。きつとお兄ちゃんが触ったらやけどするくらいにね。」

「そんなか!?でも、普通の熱中症じゃそんなには……。」

「まあ、普通のならね。だけど、お兄ちゃんとおぎゆうの違いは種の<sup>しゅ</sup>違い。恐らく、妖怪

の熱は普通の人間の治し方じゃ完治はしないみたいね。実際、楽になっただけでまだ熱

は全然あるわ。」

そういえば、この前<sup>えるふ</sup>妖精が妖怪について調べてたつて言ってたな。

あいつならもしかしたら、おぎゆうの熱の原因を知ってるかもしれない。

「砂亜菜、もしかしたら妖精ならなら治せるかもしれない。」

「確かに、エルなら過去に色々調べてたから知ってるかもね。じゃあ、エルに聞いてみましょう。場合によってはこの熱が大きいことを引き起こすかもない。人間でも熱中症は危ないものよね。それと同じで、妖怪ものによつては弱いかも。」

「おぎゆう、俺の部屋でゆっくりしてな。俺と砂亜菜で行ってくるから。」

「うん…、いつてらっしやい。あ、砂亜菜。」

砂亜菜は振り返り、おぎゆうの言葉を待つ。

「ありがとう。」

「つもう。アタシはただお兄ちゃんの手伝いだから！」

「砂亜菜、ツンデレだね…。」

「ああ、確かに砂亜菜はツンデレだ。俺もよくそのせいで――」

「うるさい!!」

俺の頬が再び襲われる。

その痛みを頬にかすかに感じながらふたりで妖精のもとへと向かった。